まほろまてぃっく～癒されしセカイ～

浅沼 文生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
まほろまてぃっく～癒されしセカイ～

【Ｎコード】
Ｎ６６０４Ｊ

【作者名】
浅沼　文生

【あらすじ】
決して許されることの無い大量虐殺をした少年９９９。管理者のマインドコントロールが解かれ、一般生活に戻された。
罪の記憶に押しつぶされそうになる少年と、共に暮らす事になる少女は、
かつて地球を救ったヴェスパー最強アンドロイドと同タイプのＶ１０４６－Ｓ　まほろ　であった。
少年は彼女との暮らしの中で、失った人間性をひとつひとつ取り戻していく・・・・・・。

1話　『幼年期の終わり』（前書き）

この作品は『まほろまてぃっく』のニ次創作シナリオです。
シナリオ形式ですので、あまり状況描写説明文がありませんのでご了承ください。
『まほろまてぃっく　～癒されしセカイ～』は原作のその後のストーリィになります。
まず、原作を読んで頂いてからの閲覧をお勧めいたします。
２００９年１０月に放送された、『まほろまてぃっく特別編　ただいま◆おかえり』に、感化され製作しました。
「俺の見たかったのは続編なんだ」と言う想いが込められています。
大きく起承転結に物語を分けた全４話になります。
（３話が長くなるので、３話序盤部分を予定よりヴォリュームアップさせて２．５話として独立させました）
ぜひ楽しみながら読んで頂ければ幸いです。

1話　『幼年期の終わり』

まほろまてぃっく
～癒されしセカイ～

――――――

ヴェスパー最強のアンドロイドであったＶ１０４６－Ｒと同型。マシューよりＶ１０４６－Ｒをヴェスパーが授かった時に共に受け取っており、封印され続けていた。Ｖ１０４６－Ｒとは別個体であるが、その性格はほぼ変わりは無い。清く正しい、優しい性格をしている。

安藤　ななみ　アンドウ　ナナミ　（２０代）
ヴィナス所属。かつて管理者の下で洗脳を受け７７３と呼ばれていた彼女は、９９９の未来を案じている。Ｖ１０４６－Ｓ　まほろの上司となる。ななみの言う「大佐」とは美里優の事だが、彼の最終階級は「少将」。ななみが間違えている。

フェルドランス　（３０代）
原作の優と戦い死ぬ２年前のフェルドランス。冒頭のみ登場し、９９９のマインドコントロールを切る。

スラッシュ
かつてＶ１０４６－Ｒ　まほろのサポートメカだった記憶を受け継ぐスラッシュ。Ｖ１０４６－Ｒ　まほろと最後を共にした瞬間までの記憶が保存されている。

帆風博士　ホカゼ（４０代）
ヴゥスパー時代から、マシューより授かったＶ１０４６シリーズの管理やメンテナンスをしていた。引退しようと考えている。

――――――

1話　『幼年期の終わり』

管理者とヴィナスの最後の戦いが行なわれる2年前……。

火星、管理者前戦基地内。（夜）

各施設がヴィナスに制圧されつつある。建物の屋上に少年９９９（１１歳）。焼けて壊れていく施設を楽しそうに見ている。

その隣にフェルドランスが降り立つ。

９９９「失態だな、フェルさん。これでここも終わりだ」

フェル「スリーナイン、船を用意したよ。たぶん最後の航海になるけど、一緒にどうだい？」

９９９「嫌だね。俺はここで一人でもヴィナスを殺し続けてやる、ククク」

フェル「もう、辞めにしないかい。管理者に忠誠とか、今更バカみたいじゃないか」

９９９「てめぇ、裏切る気か……それなら容赦しねぇぞ。アンタと一度やりてぇと思っていたんだ。その女みてぇな生っちろい肌を切り刻んでやるよ」

フェル「すまないが、この後全力で戦いたい相手がいるんだ。君には卑怯な手を使わせてもらおう」

フェルドランスが隠し持っていた小さな発信機のボタンを押すと、９９９は脳が焼け爛れる感覚に襲われる。

９９９「！！……てめぇ……何を」
フェル「管理者のマインドコントロールを断ち切った。スリーナイン、君は今までしてきた管理者としての行為に耐えることが出来るかな」

９９９の脳裏に今まで行なってきた非道の数々がフラッシュバックする。

９９９「うぁ……ぁぁぁあああああ！！！」
フェル「破壊活動、拷問、大量虐殺。まともな人間の精神が受け止められる事じゃない」

９９９は苦しみながらバランスを崩し、燃え盛る建物の下へ落ちていく。

フェル「ボクも罪を清算しに向かうとするよ。君がどんな答えを見出すのか見届けられなくて残念だよ、スリーナイン」

――――――

９９９の釈放日、当日。ヴィナス職員ななみ（２０代後半）と、９９９（１４）が一室で話している。

ななみ「貴方の行動はヴィナスの監視下に置かれます。貴方が望むならばヴィナスで働くことも可能です」
９９９「もう俺を一人にしてくれ……」
ななみ「……あなたは拘束中５回逃走を図り、３回自殺未遂をしました。未青年保護の面で監視は避けられないと考えてください」
９９９「目を瞑ると誰かを殺している自分が写る……。夢なんかじゃねぇ。過去に現実として俺が行なってきたことだ。俺なんかが生きていていい訳がねぇんだ……」
ななみ「かつて私も７７３と呼ばれて改造を望んでいた。そうしなければ私は殺され、皆も殺されると思っていたから……。貴方は私の頃とは違って精神的なマインドコントロールではなく、脳にチップを埋め込んだ物理的なマインドコントロール。そこに貴方の意思は介在しなかったはずよ」
９９９「……お姉さんもあそこ出身か。通りで親身に色々説明してくれるなとは思ってた。……なら解るだろ。意志が無くたって記憶ははっきりある。誰をどう殺したか鮮明に覚えている。そんな死を多く見てきた人間がまともな生活に戻れると思うのか」
ななみ「戻れます。私は必ず戻れると信じています」

ななみの心に血みどろになって戦う優の姿が、９９９に重なって見える。

ななみ「戦闘用として改造されていた貴方の体は、ヴィナスとセイントの医療技術によって８０％生身に戻っています。もう人間として生きていきなさい」
９９９「……きっとあんたは幸せに生きてこれたんだろうな。あそこから出てまともになれるなんて羨ましいよ」

本部から去っていく９９９。ビルの一室からそれを眺めるななみ。
ななみ「（大佐はもうここにはいない。何か彼に、私の弟である彼に、してやれる事はないの？）」
ななみの携帯が鳴る。

――――――

ななみ「私、かすかに覚えています。Ｖ１０４６－Ｒそっくりです……。彼女の記憶は？」
帆風「Ｖ１０４６－Ｒまほろと同時にマシューより授かったままの状態。まっさらだ。一応一般知識は植え込まれているがね。だからこそ記憶のない彼女を優君には引き合わせられなかった。残酷すぎる」
ななみ「大佐はもう平気です。それよりこの子は私の部下として宜しいのですか」
帆風「もうこのヴィナスで託せるのは君しかいないと考えている」
ななみ「私はもう、アンドロイドとは言え命を無駄にさせたくはありません。この子の寿命はどうなっているのでしょう」
帆風「Ｖ１０４６－Ｒの初期値と同じだけある。戦闘さえ行なわなければ、人間の寿命よりはるかに長いよ。だからこそ私は管理者が殲滅される時を待っていたんだ」
ななみ「解りました。Ｖ１０４６－Ｓを起こしてください。彼女に任務を与えます」

――――――

目の前で子供がはしゃいでいる。注意して母親が大人しくさせる。
昔、女子供を容赦なく殺した時の血の生暖かさがフラッシュバックする。気分が悪くなり口を押さえる９９９。
隣の座席に座っていた老婆が声を掛けてくる。

老婆「どうしたのかね、具合が悪いのかい」
９９９「大丈夫だ、大したことない。関わらないでくれ……」

その時、無人バスの車体が大きく揺れ、速度を増す。停留所に止まらないのでざわめく乗客。
９９９が窓の外を確認すると、他でも同様に都市機能が制御不能になっている。
街の大型街頭ＴＶスクリーンには、反『地球セイント統合政府』による犯行声明が流されている。

９９９「（管理者の手口ではない。稚拙な愉快犯だな。最近じゃテロもクリックひとつって訳か）」

子供が大声で泣き始め、抱きしめる母親。老婆は祈り始める。

９９９「（こんなテロ、ヴィナスが介入して１０分でカタが付くってのに……！）」

突如、スピードが付き過ぎた無人バスは立体道路を飛び出し、路肩を突き破る。
路肩を突き破った衝撃に悲鳴が上がる。９９９は無人バス内の人数を確認する。老婆と母子、そしてあと二人だけだった。
落下するバスの中、９９９は瞬時に5人を無理矢理つかみ、後ろの窓を割って、道路へと飛んだ。乗客は誰一人として何が起こったか解らなかった。

道路に無事、全員を着地。なぜ車外にいて無事なのか理解できぬ乗客たちに声を掛ける９９９。

９９９「ここに居ればすぐにヴィナスが助けに来る。じゃあな」

きっと監視が報告していると考え、去る９９９。

街のＴＶスクリーンには都市機能は回復し、犯人はヴィナスにより逮捕されたとニュースが流れる。

ーーー

風の運んだ花びらは
貴方の胸に、とまりましょう

９９９が庭に出ると、メイド服姿の少女と子犬が、紫陽花の花に囲まれ戯れていた。

まほろ「すみません、勝手にお庭に入ってしまって……。紫陽花の花がとってもきれいだったものですから」
９９９「君は……？」
まほろ「私はヴィナスより派遣されましたＶ１０４６－Ｓ　まほろと申します。今日から貴方のお世話をさせて頂きます」

――――――

まほろ「ななみさんからこのお手紙を預かっています。全てにお答えできると思いますよ」

手紙を渡され読み始める９９９。

『９９９さん。今頃戸惑っている事でしょう。
Ｖ１０４６－Ｓ　まほろ　は、私の部下としてあなたに派遣したお世話係りです。身の回りの事は任せると良いでしょう。今後、まほろとの生活が、あなたに良い影響を与えると信じています。
　その家は、ヴィナスで私の上官だった人が住んでいた家です。火星旅行で数年家を空けるそうなので、その家の管理をかねて貴方とまほろにお願いします。犬のどりの世話が家を貸す条件だそうです。

　あと貴方は１４歳です。学校入学の手配をしておきました。明日から学校へ行き、歳相応の生き方を学んでください。入学に際して、名前をいつまでもナンバーでは都合が悪いでしょう。今後は美里狗狼（みさとくろう）と名乗ってください。この家の持ち主でもある私の上官が養父と言う事になっています。

　最後になりましたが、まほろはアンドロイドとして生まれたばかりで世の中を良く知りません。貴方がまほろを守って、助けてあげてくださいね。
　またお会いしましょう。同郷の弟、美里　狗狼さん。　ななみ』

狗狼「（ヴェスパー最強のＶ１０４６－Ｒと同タイプのアンドロイドを守る？　どう言う事だ。明らかに俺より戦闘能力は高いはずだが……）」
まほろ「狗狼様、と呼んで宜しいですか？」
狗狼「様なんて付くほど、俺は高尚な人間じゃない」
まほろ「では狗狼さん。ですね」

狗狼「アンタのことはなんて呼べばいい」
まほろ「私の方が少しだけ背が高いですね。今後一般社会にかかわって行きますから、私のほうが年齢が高く見られると思います。恐縮では御座いますが、『まほろさん』がよろしいかと思います」
狗狼「（監視役に『さん』付けか・・・・・。まぁいい、今は刺激するべきじゃない）　それで構わない」
まほろ「はい、それでいきましょう。ななみさんより、仮の名を安藤まほろと名乗るように言われています。明日の学校の準備は私が致しますので、お風呂に入ってくださいね。狗狼さん」

――――――

さいまし」

うろたえる狗狼を後ろから抱き寄せて湯につからせる。鼻歌を歌うまほろ。

しばらく動けない狗狼。だが、まほろの腕を振り払って無言で風呂から出て行く。

まほろ「え、狗狼さん？」

――――――

ドアを開ける狗狼。

狗狼「まほろさん、アンタ何言ってんだ？」
まほろ「え？」
狗狼「アンタの任務は俺の監視だろ？　ヴェスパー最強のアンドロイドの同型で、俺が逃走しようものなら一瞬で抹殺する力をもっていやがる。だからここに来たんだろ」
まほろ「ヴェスパーって何ですか？　同型は居たとは聞きましたが、詳しくは……。私はななみさんに固く、戦うことを禁止されています。貴方を攻撃するなんてもっての他です」
狗狼「戦う事を禁止？」
まほろ「はい、私の戦闘は寿命をすり減らします。今は人間の寿命より長い状態ですが、戦闘をし続けると5年と持たない体なのだそうです」
狗狼「早く言ってくれよ……。アンタがそんな体って言うなら俺……」
まほろ「？」

狗狼はそのまま一瞬で部屋を抜け、窓を割り外へ飛び出す。

狗狼「逃げられるって事だろ！」

――――――

スラッシュ「させねぇよ」

着地した狗狼は反撃する。

狗狼「チッ、まだ居たか」

スラッシュ「バスで人を助けていたから、チッとはマシな奴かと思ったら」

狗狼「お前が監視者か！」

狗狼とスラッシュは完全に戦闘状態となる。

割れた二階の窓からその様子を見るまほろ。

まほろ「やめてください！やめなさい！」

狗狼「お前を倒して、俺は自由になる」

スラッシュ「青二才がっ！」

どり「わうわうわう」

狗狼とスラッシュはもつれあい、花壇の紫陽花に突っ込んでしまう。

まほろはそれを目にして、表情が凍る。

狗狼とスラッシュは再び飛び上がり、戦おうとするが、まほろの打撃によりスラッシュが地面に沈む。

そのまま狗狼へとまほろは飛び掛る。応戦する狗狼。

狗狼の全ての攻撃を受け流し、まほろは確実に狗狼の急所に打撃を入れていく。

そして、圧倒的な身体能力により、狗狼はねじ伏せられる。

狗狼「グッ……！攻撃してるじゃねぇか、反則だろ！」

まほろ「紫陽花の花壇が滅茶苦茶じゃないですか！　しっかりお手入れのされていた花壇をこんなにして、私許しませんよ！」

狗狼「……アンタそんな事のために寿命を……」

まほろ「そんな事どうでもいいんです！　……あ」
スラッシュ「……なんてこった。まほろを戦わせちまった」
狗狼「だいたい何なんだテメェは！」
スラッシュ「オレッチは、まほろのサポートメカだ。Ｖ１０４６－Ｒの頃からサポートしていた記憶がある。お前とは初めてだな、Ｖ１０４６－Ｓ　まほろ。お前はオレッチのマスターだ。今度こそお前を守ってやるぞ」
まほろ「スラッシュですね。私がマスターなら、私がお世話をする狗狼さんもマスターです。先ほどの様なことは許しませんよ」
スラッシュ「でもまほろ、コイツ逃げようとしたんだぞ。そのせいでお前は寿命を……」
まほろ「仕方ありません。私が自らしてしまった事です」
狗狼「（俺が逃げ出さなければ、寿命を縮めずに済んだ……と言うのか。糞っ）」
狗狼「辞めた辞めた、今日はもう寝る」

家に入っていく狗狼。

スラッシュ「なんだあの野郎の態度は」
まほろ「……」

――――――

まほろ「寒くはないですか」
狗狼「別に、フトンあるし」
まほろ「そうですか……」
狗狼「……俺、もう逃げないから」
まほろ「え？」
狗狼「もう逃げないから、まほろさんはもう戦うな」
まほろ「……」
狗狼「……もう、目の前で誰かが死んだりとか、殺したりとか、嫌なんだよ……それだけだ」
まほろ「……はい、わかりました。もう戦闘をしません。お約束します」

狗狼はくしゃみをする。

まほろ「やっぱり少し冷えますね、他の部屋でお休みになられたらどうですか」
狗狼「いい、ほっといてくれ」
まほろ「なら私もここで寝ます」

狗狼の潜っていた布団に、入ってくるまほろ。

まほろ「ほら、こうすれば暖かいですよ」
狗狼「……警戒心とか全くないのな、まほろさん」
まほろ「え？　私また何かおかしな事しましたか？」
狗狼「いや、なんでもない。明日は学校か……、寝るよ。お休み」
まほろ「きっと楽しい学校生活になりますよ。お休みなさいませ、狗狼さん」

――――――――――――――――――――――――――――

――――――

2話　『アルジャーノンに花束を』

まほろまてぃっく

～癒されしセカイ～

―――――――

ヴェスパー最強のアンドロイドであったＶ１０４６－Ｒと同型。マシューよりＶ１０４６－Ｒをヴェスパーが授かった時に共に受け取っており、封印され続けていた。Ｖ１０４６－Ｒとは別個体であるが、その性格はほぼ変わりは無い。清く正しい、優しい性格をしている。

浜口　みなこ　ハマグチ　ミナコ　（１４）
狗狼のクラスメイト。母からまほろの事を聞かされており、まほろに対して強い憧れを持っている。見目と性格は、幼い頃の母みなわと瓜二つ。

スラッシュ
かつてＶ１０４６－Ｒ　まほろのサポートメカだった記憶を受け継ぐスラッシュ。Ｖ１０４６－Ｒ　まほろと最後を共にした瞬間までの記憶が保存されている。

寺島　玲子　テラシマ　レイコ　（１４）
生まれも育ちも緋立市であるが純粋なセイント。狗狼やみなことクラスメイトであり、クラスの委員長。曲がったことが大嫌いで、思い込んだら即行動。非常に活発な子である。自分の性格がセイントらしくない事を気にしている。原作最終話にて、班行動を乱す男子生徒を叩き暴力に訴えていた。

１０００　サウザンド　（２話冒頭１１、本編１４）
管理者で改造を受けた者の一人。破壊と殺戮を好み、誰よりも人を殺した９９９を慕っていた。

等々力　凛　トドロキ　リン　（３０代）
教師としては若手であり、まだまだ落ち着きの無い様子。ヴィナスより狗狼についての事情説明を受けている。狗狼のクラスの担任教

師。

――――――

１０００「痛いんだ……。いえ、『辛い』のね。そっか、マインドコントロール切れちゃったのか」

９９９が落ちてきた上を見上げる１０００。

１０００「フェルドランスが裏切ったのね。安心して、スリーナイン。後でサウザンドが『殺す』から」

声を上げて苦しむ９９９。

１０００「『殺す』しか出来ないサウザンドに、スリーナインの『辛い』を止めてあげられない……」

建物の下にヴィナスの戦士達が侵攻してきたのが見える。

１０００「あ、あいつらに『治療』させればいいんだね。サウザンド、『殺す』以外の人との接し方よくわからないけど、こうかな」

建物の壁を破壊して、９９９をヴィナスの戦士たちの集団に片手で投げ込む。

１０００「『治療』できたら迎えに行くね、スリーナイン」

――――――

既にまほろはベッドにおらず、床で寝ていたはずの狗狼は、まほろによってベッドに運ばれたようだ。

狗狼「（サウザンドは俺と同じように殺戮を楽しんでいた……。1年前の、管理者が根絶やしにされたと言う戦いから後、サウザンドが動いているようなテロは起こっていない）」

息を整え、汗をぬぐう狗狼。

狗狼「（もう死んだはずだ。サウザンドの事を今更思い出すなんて……。どうかしている）」

まほろ「狗狼さん、朝ですよー。あ、もう起きていらっしゃったんですね。おはようございます」

狗狼「お、おはよう、まほろさん」

まほろ「狗狼さん、私が朝起きたら床に落ちてましたよ。寝相が悪いのですね、フフフ」

狗狼「え〝、いや、あれはまほろさんが……」

まほろ「朝食の準備は出来ていますから、早く降りてきてくださいね」

階段を下りていってしまう、まほろ。

狗狼「……起きるか……」

――――――

居間の食卓には色とりどりの料理が、テーブルいっぱいに用意されている。

狗狼「う……」
まほろ「朝食は体の基本です。具合でも悪いのですか？」
狗狼「いや、俺いつも朝飯食わないからさ。こんな量、半分も食べられないよ」
まほろ「これは3人分ですよ」
狗狼「あの黒豹アンドロイドも食うのか？」
まほろ「スラッシュはエネルギー補給を必要としませんよ」

家のチャイムが鳴る。

まほろ「来ました、はーい」

居間にセーラー服を着た女の子を連れてくるまほろ。

まほろ「ななみさんの姪にあたる、みなこちゃんです」
みなこ「は、はじめまして、みなこと申します。よろしくお願いします」

深々と頭を下げるみなこ。しかしその勢いで足がふらつき、倒れてしまう。

まほろ「あらあら、大丈夫ですかみなこちゃん」
みなこ「ご、ごめんなさい。緊張してしまって……」

まほろ「学校での事はみなこちゃんにお任せすればいいと、ななみさんから聞きました」
みなこ「そ、そんな大それた事は、で、出来ませんが、頑張ります」

みなこは顔を真っ赤にしている。

狗狼「狗狼だ。よろしくな」
みなこ「はい、こちらこそよろしくお願いします」
まほろ「今日は早めに来て頂いて、朝食を食べていってもらおうと思いまして。どうぞ召し上がってください」
みなこ「は、はい、頂きます」
狗狼「いただきます」

狗狼とみなこに衝撃が走る。

狗狼「まほろさんもしかして、料理無茶苦茶上手くないか？」
みなこ「美味しいです……」
狗狼「（昨日の軽食も美味かったが……こんなにも）」
まほろ「料理はメイドの基本中の基本です。とことんこだわって作っています」
みなこ「これ、どうやって作ったんですか」
まほろ「今度お教えしましょうか、みなこちゃん」
みなこ「ほ、本当ですか、ありがとうございます」

頭を下げるみなこは、テーブルに頭をぶつける。

狗狼「うわ」
まほろ「大丈夫ですか、みなこちゃん」
みなこ「ごめんなさい、ごめんなさい」
狗狼「（この子、本当に大丈夫なのか）」

――

ーーー

――――――

みなこ「……ごめんなさい、よくわからないです。でも今日会えたお姉ち、あ、まほろさんは、母の話と同じように素敵な人でした……」
狗狼「まほろさんに、別人の話とかあまりしないほうがいい。誰だって別人と比較されたら嫌なんじゃないか」
みなこ「……ご、ごめんなさい……」
狗狼「（う……、俺何言っているんだ……。Ｖ１０４６－Ｒと今のまほろさんを比較されたくないのは、俺……なのか！？　糞っ）」

――

２－４教室。担任教師、等々力　凛（３０代）先生に教壇で紹介される狗狼。

凛「お父さんの仕事の都合で緋立市に越して来た美里　狗狼くんです。みんな仲良くね。狗狼くん、一言挨拶してもらっていいかな」
狗狼「はい。俺は基本的に根暗です、余り関わらないでください」

そう言うと、さっさと後ろの空いている席に座ってしまう。
ざわつく生徒達。心配そうに見ているみなこ。焦る凛先生。

凛「は、はい。じゃあ授業始めますよー。（こ、これは、予想以上に問題児かも……）」
狗狼「（学校ってこんなもんか。ガキばっかなんだな……）」

――

２―４教室。昼休み。
バッグを持ってフラっと立ち上がる狗狼。みなこが声を掛けようとする。

みなこ「……あ、あの」
玲子「美里　狗狼くん！　朝のあの一言はよくないと思う！　凛先生も困っていたじゃない」
狗狼「誰？」
みなこ「クラス委員長の……」
玲子「寺島　玲子よ。よろしく」
狗狼「以後、気をつけるよ。じゃ」
玲子「ちょっと、どこ行くの」
狗狼「静かなところで飯を食うんだ」
玲子「あのねぇ、何も解って無いじゃない。朝の事といい、今のといい、そんなんじゃ友達とか出来ないわよ」
狗狼「（なんなんだ、うるせぇな……）」
みなこ「あ、あの、ごめんなさい！ごめんなさい！」
玲子「な、何でみなこちゃんが謝るのよ。みなこちゃんもすぐ謝るの良くないよ！　謝るって事は負けを認めるって事だよ」
みなこ「え……、あ、あ、ごめんなさい！」

みなこは教室から走って出て行ってしまう。

玲子「ええ！？　ちょっと待って、みなこちゃん。美里　狗狼くん、そこで待っていなさい」

追っていく玲子。溜息をつく狗狼。

――――――

みなこは、屋上から見える街並みを眺める。

狗狼「こんな狭い世界で、自分を決め付けちまうのは、早いんじゃねぇの」

みなこ「狗狼さん……、根暗なのに、言っている事が凄く前向きです」

狗狼「悪かったな」

みなこ「私、お姉ちゃ……まほろさんみたいになりたいです」

狗狼「なれるさ、なんたって姉妹の血を引いてるんだろ」

みなこ「あ……はい！　私、頑張ってみます。……だから」

狗狼「ん？」

みなこ「狗狼さんも、頑張ってください。私には、狗狼さんも皆から逃げているように見えました」

食べていた弁当を詰まらせる狗狼。パックの牛乳を飲んで平穏を保つ。

狗狼「まほろさんと言い、みなこちゃんと言い、どうしてそんなにお節介なんだ……」

みなこ「たぶん、姉妹の血です」

狗狼「なるほど、解った。邪険にせずにちゃんと向き合うよ」

みなこ「はい」

玲子「見つけた！　みなこちゃん、バカな事しちゃだめ！」

みなこ「え？」

屋上に駆け込んできた玲子は、凄い勢いでみなこに抱きつく。ふらつくみなこ。

玲子「みなこちゃんが自殺するほど思いつめていたなんて知らなかったのよ！」

みなこ「委員長、違うよ。私そんな事しないよ」
玲子「ホント！？　本当に！？」
凛「二人とも！　何してるの！？　女の子同士で心中！？」
屋上に駆け込んできた凛は、凄い勢いで二人に抱きつく。大きくふらつくみなこ。
凛「バカな事しちゃだめ！」
みなこの足がふらついて、柵に倒れこむ。柵は錆びており、折れてしまう。
みなこと凛の体が屋上の縁から躍り出る。飲んでいた牛乳を投げ捨て走る狗狼。
玲子「え……」
玲子の視界から二人が柵の向こう側へ消える。放心する玲子の横を走って飛び込む狗狼。
校舎から落ちるみなこを、落ちながら抱きとめる狗狼。共に落ちる凛先生に手を伸ばすが届かない。
狗狼「スラッシュ！」
黒い塊が凛先生の服の襟首をくわえ込み、着地する。
狗狼もみなこを抱いて着地する。
着地した瞬間、狗狼とスラッシュは垣根の中に姿を隠す。
スラッシュ「気づいて居やがったか」
狗狼「あたりめぇだ」

屋上から下を見る玲子

玲子「なんなの……」

ーーー

凛「宜しい。じゃあ今回の事、校長にはくれぐれも内緒よ！　失職しちゃうわ」
生活指導室から出て行く凛先生。
凛「今度まほろさんの料理食べに家庭訪問に行くからね」
狗狼「（教師って何でも知っているんだな……）」

――――――

少し離れて立つマンションを指差す。

狗狼「送って行くよ」

みなこ「え？　駄目です。私が狗狼さんを送り迎えするように言われているのに」

狗狼「（ん？　あー、まほろさんにも会いたいのか）　じゃあ、ウチから帰るときに送るよ。みなこちゃん、なんか危なっかしいし……」

みなこ「危なっかしい……お姉ちゃんは程遠いです」

狗狼「（いつもまほろさんの事をお姉ちゃんと言っているな）　ん？」

委員長が決意を秘めた目で、二人の前に立ちふさがる。

玲子「狗狼くん、何者なの！　セイントの戦闘アンドロイド？！　それとも外宇宙の侵略者！？」

みなこ「あ、あ、狗狼さん、み、見られていたみたいです。ごめんなさい、ごめんなさい」

狗狼「落ち着け、みなこちゃん　（どうすっかなぁ……）」

玲子「さぁ、どうなの！」

狗狼「委員長、アンタそれを知ってどうする気だ。興味本位で踏み込むと後悔するぞ」

玲子「お、脅そうって言うの！？　チカン防止用のブザーぐらい持っているんだから！」

みなこが狗狼の袖をつかみ、悲しそうな顔をする。

狗狼「（う、俺が悪いのか）」

まほろ「あ！　狗狼さん、みなこちゃん！　今お帰りですか」

買い物袋を下げたまほろが商店街の方からやってくる。

玲子「メ、メイドさんだ……」

まほろ「あら、もうお友達が出来たのですか。私、ヴィナスから派遣されて参りましたメイドの安藤まほろと申します」

玲子「ヴィナス……あの反『地球セイント統合政府』とかと戦っているヴィナス……」

委員長は疑惑の目線を狗狼に向けるが、狗狼は視線をそらす。みなこはオロオロしている。

まほろ「せっかくなので、皆さんでお茶しませんか。ケーキを作ったのですが」

――――――

玲子「自分も落ちていってキャッチして助けたのよ、無茶苦茶よ！
　人間技じゃないわ！」
まほろ「あらあら」
玲子「こう見えても私セイントだから、セイントの科学力がどれほどのものか知ってはいる。あんな身体能力を持つのはセイントの戦闘アンドロイドか、それと戦う敵だけよ！」
狗狼「えーと、俺達はヴィナス関係者なんだよ。極秘裏に学校に潜入している。凛先生も当然知っている事だ」
玲子「え、そうだったの……。あ、安心したわ。みなこちゃんも巻き込まれて、何か大変な事になっているのかと思って、私ったら恥ずかしい……」
狗狼「解ってもらえてよかったよ」
まほろ「狗狼さん、……辞めましょう。真実を覆い隠す嘘は、貴方を傷つけるだけだと思います」
狗狼「……」
みなこ「そうです、駄目です狗狼さん。もう逃げないんじゃなかったんですか」
玲子「え？　何、なんなの」
狗狼「……俺……、俺は……」

――――――

玲子「ぎゃ……虐殺って……。そんな……」
狗狼「俺は許されるなんて思ってない」
まほろ「狗狼さん……」
玲子「……当然だよ……管理者だなんて……。私の母さんは管理者に殺されたんだ！」
狗狼「……！」
玲子「う……」

席を立って出て行く委員長。

狗狼「待て、待ってくれ」

委員長の手首をつかむ狗狼。

玲子「嫌っっ！　怖い！」

怖いの言葉に反応し、手を離す狗狼。玄関から走り出て行く委員長。

みなこ「狗狼さん……」
狗狼「まほろさん、みなこちゃんを家まで送っていってあげてくれないか。俺は部屋で休むよ」

自室へと上がっていく狗狼。

まほろ「わかりました。みなこちゃん、行きましょう」
みなこ「はい……」

――――――

街中。（夕）
まほろとみなこ、二人で夕暮れの街を歩く。

まほろ「今日は色々あって大変でしたでしょう、ありがとうみなこちゃん」
みなこ「いいえ。私、狗狼さんに助けられてばかりでした……」
まほろ「皆で助け合っていければ、それでいいんですよ」
みなこ「……私が屋上なんて行かなければ、狗狼さんの能力を委員長に見られる事もなかったのに……ごめんなさい」
まほろ「いつかはバレてしまう事です。委員長さんがお母様を亡くされていた事は、確かに悲しみに拍車をかけてしまいましたが、話さなければ分かり合えることはありません。狗狼さんは勇気をもって話されました」
みなこ「狗狼さんは逃げずに頑張ったんですね……」
まほろ「はい」
みなこ「……あの、お願いしたい事があります！」

――――――

跳ね起きる狗狼。緑のメイド服に身を包んだみなこが居た。

狗狼「……」

みなこ「おはようございます、狗狼さん。あ、母のお古のメイド服なんですけど似合いますか？」

まほろ「みなこちゃん、狗狼さん起きましたか」

みなこ「はい、お姉ち、あ、まほろさん」

まほろ「お姉ちゃんでいいですよ。お母様がそう呼んでいらしたのを聞いてうつっちゃったんですか」

みなこ「昔から母に聞かされていて、ごめんなさい」

まほろ「いいんですよ、私も妹が出来たみたいで嬉しいです」

狗狼「え、何なの。どうなっているのまほろさん」

まほろ「今日から住み込みで、みなこちゃんもメイド見習いとして一緒にお世話することになりました」

みなこ「私も頑張ります、狗狼さん」

狗狼「（そうか、みなこちゃんも頑張る……か）　はぁ、学校行くか」

まほろ「当然ですよ。さぁ二人とも朝ごはんにしましょう」

――――――

まほろ「おはようございます、委員長さん」
みなこ「あ、あ、おはようございます」
玲子「あれからさ、どう恨みを晴らそうかとか、考えたんだけど、そのまま寝ちゃってね。夢にお母さんが出てきたんだ……私のこと泣きながらひっぱたいてた。あんなお母さん生前見たことないよ」
狗狼「……」
玲子「考えてみれば、マインドなんとかって自分の意志じゃなかったって事でしょ。なんか狗狼くんに言ったりするのって違うかなって。よくわかんないけど」
狗狼「恨んでいいんだ。それだけの事を俺は……」
玲子「なんか、恨まれた方が楽って言っているように聞こえるよ。恨んであげない。そんな事よりさ、昨日『怖い』とか酷い事言ってごめん」
狗狼「……俺も学校の全員をガキだと思っていた。ごめん」
玲子「そんな事思っていたの？　狗狼くんの方がよっぽどガキじゃない」
みなこ「狗狼さん今日学校行きたく無いって、子供みたいなダダこねてました」
狗狼「ダダじゃねぇよ！」
まほろ「フフフ、みなさんそろそろ行かないと遅刻してしまいますよ」
みなこ「いってきます、お姉ちゃん」
狗狼「いってきます、まほろさん」
玲子「いってきます、メイドさん。今度はゆっくりケーキ食べに来るね」
まほろ「はい。皆さん、いってらっしゃいまし」

――――――

美里家が見えるビルの屋上。
黒いゴスロリに身を包んだ少女（１４）が、登校する狗狼達を見ている。
１０００「スリーナイン。『治療』……終わったね」

まほろさんが、消費した命

５年４ヶ月と２日

まほろまてぃっく　～癒されしセカイ～　２話　『アルジャーノンに花束を』　ＥＮＤ

――――――

2．5話　『猫たちの饗宴』

まほろまてぃっく

～癒されしセカイ～

―――――――

ヴェスパー最強のアンドロイドであったＶ１０４６－Ｒと同型。マシューよりＶ１０４６－Ｒをヴェスパーが授かった時に共に受け取っており、封印され続けていた。Ｖ１０４６－Ｒとは別個体であるが、その性格はほぼ変わりは無い。清く正しい、優しい性格をしている。

浜口　みなこ　ハマグチ　ミナコ　（１４）
狗狼のクラスメイト。母からまほろの事を聞かされており、まほろに対して強い憧れを持っている。見目と性格は、幼い頃の母みなわと瓜二つ。

スラッシュ
かつてＶ１０４６－Ｒ　まほろのサポートメカだった記憶を受け継ぐスラッシュ。Ｖ１０４６－Ｒ　まほろと最後を共にした瞬間までの記憶が保存されている。

寺島　玲子　テラシマ　レイコ　（１４）
生まれも育ちも緋立市であるが純粋なセイント。狗狼やみなことクラスメイトであり、クラス委員長。曲がったことが大嫌いで、思い込んだら即行動。非常に活発な子である。自分の性格がセイントらしくない事を気にしている。母を管理者に殺された経緯を持つが、狗狼の過去を理解し受け入れた。

安藤　ななみ　アンドウ　ナナミ　（２０代）
ヴィナス所属。かつて管理者の下で洗脳を受け７７３と呼ばれていた彼女は、９９９の未来を案じている。Ｖ１０４６－Ｓ　まほろの上司となる。ななみの言う「大佐」とは美里優の事だが、彼の最終階級は「少将」。ななみが間違えている。

川原深雪　カワハラ　ミユキ　（３０代）

美里優とは幼なじみ。銭湯「さくら湯」の４人姉妹の長女。しっかり者。現在は、川原清巳と結婚し夫婦で酒屋を営んでいる。旧姓佐倉深雪。

等々力凛　トドロキ　リン　（３０代）
美里優とは幼なじみ。巨乳とロングヘアがトレードマークのマイペース娘。現在は、狗狼の通う中学の教師。独身。

大江千鶴子　オオエ　チズコ　（３０代）
美里優とは幼なじみ。美味しい食べ物に目がなく、まほろの手料理の大ファン。現在は、ベストセラーの小説家。独身。

――――――

美里家、庭。（夕）
テラスにて等々力凛とななみがお茶を飲んでいる。
ななみ「本当にありがとうございました、凛さん。貴方が学校側を説得してくれたから、狗狼さんも入学出来ました」
凛「嫌ねぇ、ななみちゃん。実際校長が協力してくれたからだし、私はななみちゃんが学校に通わせたいと思う気持ち、解ってたから。みなわちゃんからも頼まれたしね」
まほろ、アップルティーセットを持ってくる。
まほろ「アップルティのおかわりをお持ちしました」
ななみ「ありがとう、まほろ」
アップルティを入れ終わると、お辞儀をして家の中に入っていく。
凛「はぁ・・・・・本当にそっくりねぇ。復活して優くんと一緒に火星行っちゃったまほろさんも瓜二つだったけど・・・・・・」
ななみ「・・・・・・」
凛「ぁ・・・・・・まぁななみちゃんも優くんに振られた一人になっちゃったんだったわね」
ななみ「大佐の心にはいつも彼女が居て、入り込む余地なんてありませんでした」
凛「まほろさんには適わないよ。幼馴染全員撃沈したんだから・・・・・・あと校長もね」
みなこ、たどたどしい足取りで、クッキーを持ってくる。
みなこ「お姉ちゃんが焼いたクッキーです」
凛「ありがとう、みなこちゃん」

ななみ「みなこちゃん、今日はみなわお姉ちゃんこないの？」
みなこ「はい、母はこっちに来たがっていたんですけど、父が今日の映画のチケットを買ってきてしまって。父が落ち込むから黙って一緒に行ってくるそうです」
凛「はまぢ・・・・・・」

みなこはクッキーをこぼさない様に恐る恐るテーブルに置き、お辞儀をして家の中へ入っていく。

ななみ「みなこちゃん、昔のみなわお姉ちゃんそっくりだわ・・・・・・持って帰りたい」
凛「はまぢの血が流れているとは思えないわね。はまぢも最近じゃ、すっかり優しい旦那さんになっちゃって・・・・・・はぁ、どっかそこらに落ちてないかしら優しい旦那さん」
どり「あうあうあうあう」

川原深雪が大量の酒を袋に下げて、庭に入ってくる。

深雪「いよぅ。話は聞こえていたぞ、行き遅れ」
凛「あら、手近済ましさんじゃありませんか」
深雪「あんだと、ウチの店の持ってきたけど凛にはあげないからな」

サンドイッチを作ってきたまほろが、テラスに出てくる。

まほろ「いらっしゃいませ、深雪さん」
深雪「やっほー、新まほろさん」
ななみ「深雪さん、まほろともう会ってらっしゃったんですか」
深雪「うん、商店街で何回かね。優と一緒に旅行行った筈なのに、びっくりしたよ。まさか新まほろさんとはね」
ななみ「（ヴィナスのトップシークレットが町内井戸端会議で漏洩・

・・・・）」
まほろ「どうぞ、サーモンとフレッシュサラダのサンドイッチです。今、冷やしてコップお持ちしますね」
深雪「ジョッキでお願いね」
まほろ「はーい、かしこまりました」

まほろ、お辞儀をして家に入っていく。

深雪「んー、やっぱまほろさんはいいなぁ。私にもひとり頂戴、ななみちゃん」
凛「貴方は多くを望みすぎよ。旦那が居るんだから要らないでしょ。私に頂戴、もう一人暮らしは耐え切れないわ」
ななみ「そんなの、無理ですよ。他であまりまほろのこと話さないでくださいね。私がヴィナスで怒られます」
深雪「解ってるって。商店街じゃアタシとダンナ以外、みんな優と結婚したまほろさんだと思っているんだもん。問題ないよ」

赤面した委員長がメイド服を着て、ジョッキを持ってくる。

玲子「先生、冷えたジョッキをお持ちしました」

ジョッキをテーブルに並べる委員長。

凛「まぁ玲子ちゃん、メイド服じゃない。まほろさんに借りたの？」
玲子「あっ、あのメイドさんが『手伝うならまず形から』って、昨晩作ってくれたんです。ちょっと変ですよ。あのメイドさん」
凛「あら、とっても似合っているわ。狗狼くん喜んでくれてた？」
玲子「な！？　なんでアイツが出てくるんですか！　喜んでなんか居ません！　関係ないじゃないですか！」
深雪「今日ウチのバイトお休みにしていると思ったら、男の家に通

っているとはねぇ」
玲子「深雪さん！？　男って狗狼くんのことですか！　やめてください、そんなんじゃないです」
スカートを気にしながらお辞儀をして委員長は家の中へ。
ななみ、話している後ろでビールをジョッキについで飲み干す。
ななみ「・・・・・・素直じゃないのね・・・・・・それも可愛いけど、本命の男を逃してしまう典型的なタイプ」
深雪「うぉ、もう飲んじゃってるね、ななみちゃん。早いよー」
凛「私だって今日は負けないんだからっ」
どり「あうあうあうあう」

大江千鶴子が庭に入ってくる。

千鶴子「おー、やってるね。遅れてごめーん」
深雪「きたきた、遅いぞ美人作家」
千鶴子「アホな言い方やめてよー。もういい歳よー」
凛「私はまだそこまで割り切れないわ！　同い歳のちずがいい歳なんて信じない！」
深雪「凛は諦め悪いなぁ」
ななみ「私もいい歳に片足突っ込んでます・・・・・・」
凛「ななみちゃんが言わないでよ！　私は片足すら突っ込んで無いってば！」
千鶴子「おおおお！　このサンドイッチは、サンドイッチ専門店『クラップサンド』のサーモンフレッシュサラダと寸分違わぬ味！！」
深雪「いい歳しても、この子は話より食うのがメインだからねぇ」
凛「ちずはいい歳じゃありません！　したがって私も違います！」
まほろと狗狼が料理を運んでくる。狗狼はボーイの格好をさせられ

ている。

まほろ「お姉様方、おつまみを作りましたのでどんどん食べてください」

千鶴子「うわぁ、本当にまほろさんだ。もう一人居るなんて不思議だねぇ」

まほろ「お初にお目にかかります、安藤まほろと申します。よろしくお願いしますね」

千鶴子「私、千鶴子だよ。貴方の料理大好きなのー」

まほろ「まだまだ作りますから、是非食べていってください」

千鶴子「幸せだよぅ、ありがとうまほろさん」

委員長がこそこそと色紙とペンを持って出てくる。

玲子「大江千鶴子先生ですよねっ！　私、大ファンなんです！　サインしてください！」

千鶴子「おお、新しいメイドさんだ！　可愛いなぁ。いいよいいよー」

玲子「わぁ、やったっ！　ありがとうございます、一生家宝にします！」

サインをもらった玲子は、飛び跳ねるように家に入っていく。

凛「本当に有名人だから困っちゃうわよね」

深雪「そーだちず、あの新作面白かったよー。あれってモデル、優とまほろさんでしょ」

千鶴子「うん」

ななみビールを噴出す。

まほろ「あらあら、大変。お洋服大丈夫ですか、ななみさん」
ななみ「だ、駄目ですよ、千鶴子さん。大佐のこととかまほろのことを書いたら！」
千鶴子「大丈夫だって。名前もシチュエーションも違うし、知っている人しか解らないよー」
ななみ「ヴィナスに全出荷を止めさせなくちゃぁ・・・・・・」
深雪「ちずの本ってミリオン超えてるぞ」
凛「ウチの生徒の間でも流行ってるしね。回収はもう不可能だと思うわ」
ななみ「私が怒られるんですね・・・・・・フフフ・・・・・・」

狗狼は往復して黙々と料理を運ぶ。

深雪「ほうほうほう、あれが狗狼くんか。うんうん、どっちかって言うと最近の優っぽい雰囲気だねぇ」
凛「ちょっと、ウチの生徒をヘンな目で見ないでくれる人妻！」
千鶴子「あんな若いのに悲しみを背負っていそうな、背中！　絵になるねぇ」
凛「ちょっと、千鶴子まで何言ってるの。やめて私の最後の希望のロウソクを消さないで」
ななみ「凛さんこそ何を言っているんですか・・・・・・」

まほろ、家の前で狗狼を呼び止める。

まほろ「ネクタイ曲がってますよ」
狗狼「ホント？　ありがとう、まほろさん」
まほろ「はい、ちゃんと出来ました」

凛「・・・・・・」
深雪「やっぱまほろさんが最強か・・・・・・」

千鶴子「ぬふふふ、これは続編もいけそうだねぇ」
ななみ「駄目ですよ！　千鶴子さん」
千鶴子「ななみちゃんは固いなぁ。まぁ飲んで飲んでー」
もう寝てしまったどりを頭に乗せた黒い塊が姿を現す。
スラッシュ「随分かしましいと思ったら、嬢ちゃん達か」
千鶴子「おぉー、懐かしいのが来た！」
ななみ「おつとめご苦労さま、スラッシュ」
深雪「うわぁ、なんか同窓会みたいだ」
凛「スラリン！　もっと私を嬢ちゃんって呼んでー！」
スラッシュ「うわっ、酒臭ぇ。嬢ちゃん達も大人になったな・・・・・・」
凛「そうだもうスラリンが都合よく美男子になって私と、うにゃー！」
千鶴子「凛ちゃん最高だよ！　メモしとくよ！」
深雪「随分凛回って来たねぇ。ん？」
ななみ「大佐・・・・・・はなんでまほろさんまほろさんって・・・・・・そりゃ生き返ったからいいですけど、死んだままだったらどうする気ですか。悲しすぎますよ」
深雪「ありゃ、こっちも随分ネガっちゃって・・・・・・」
ななみ「狗狼君は、あの頃の大佐に似ていたんです。あから親身になったけど、結局まほろなんですよ。私はどうなっちゃうんですか。もう凛さんになっちゃうんですか」
凛「酷いよ！　酷いよななみちゃん！　うえぇ」
スラッシュ「首を絞めるな嬢ちゃん！　苦しい！」
深雪「アタシが言うのもなんだけど、皆そこまで焦ることないよ」
千鶴子「そうそう！　ｄｏｎ'ｔ　ｗｏｒｒｙ　ｂｅ　ｈａｐｐｙだよ」
凛「・・・・・・そうね。今更焦ったって、スラリンがいい男に変

身してくれる訳でも無いしね」
スラッシュ「無茶苦茶言いやがる・・・・・・」
深雪「あ、ななみちゃん寝ちゃった・・・・・・」
凛「ヴィナスのお仕事明けで来たんでしょ、疲れてたんだろうね」
千鶴子「あはは、可愛い寝顔。優くんにコレで迫れば良かったのにねぇ」
深雪「・・・・・・お疲れ様。ななみちゃん」

――――――

千鶴子「あー、なるほど。その辺は本当にまほろさんだねぇ」
まほろ「え？」
凛「そうそう、狗狼君に送らせないとね」
まほろ「狗狼さんにですか？　私がシルフィードで送った方が早いですよ」
深雪「今のななみちゃんには癒しが必要なんだよね」
千鶴子「ななみちゃんはその方が喜ぶのさ」
まほろ「狗狼さんが送った方がよろしいですか」
凛「もう、まほろさん圧勝なんだから、それぐらいななみちゃんにサービスすべきよ」
深雪「うんうん」
まほろ「はぁ、狗狼さんにお願いしておきます」

――――――

ななみの肩を支えてやる狗狼。
狗狼「随分飲んでたからね」
ななみ「うう、情け無い」

また狗狼がななみを軽く背負い、歩き出す。

ななみ「私は貴方の保護者なのに、こんな醜態をさらしてしまうなんて・・・・・・」
狗狼「そんなこと気にしてたのか」
ななみ「そりゃそうですよ。私ぐらいの年齢になると世の中に肘を張って生きていかなければならないんです」
狗狼「それはご苦労なこって・・・・・・」
ななみ「今、バカにしましたか!?　くぅ！　折角ここまで面倒見てやったのに！」
狗狼「うわっ、暴れるな。イテェって！」

ひとしきり暴れた後、疲れてぐったりするななみ。

狗狼「全く・・・・・・」
ななみ「・・・・・・どうですか。今の生活」
狗狼「ん？　うーん・・・・・・正直、未だに戸惑っているよ」
ななみ「・・・・・・」
狗狼「まほろさんや、みなこちゃん。委員長。皆、俺に普通に接してくれる。凛先生も事情を知っているのにすげぇ明るいし」
ななみ「そう」
狗狼「皆と暮らしていると、最近、俺・・・・・・一瞬昔を忘れそうになる時がある。その度に罪悪感に襲われる」
ななみ「忘れちゃえれば、楽なのにね」
狗狼「忘れることは出来ない。許されないことだ」

ななみ「皆と一緒に暮らすの、苦しい？」
狗狼「いや・・・・・・。楽しくて、・・・・・・怖いんだ。結局俺はどうしたらいいか解らなくなる。委員長に言われたよ『恨まれた方が楽』って言い分だって。全くその通りだ」
ななみ「まだ・・・・・・死にたい？」
狗狼「・・・・・・」
ななみ「みなこちゃんね、たまに家に帰ると貴方のことしか話さないって、みなわ姉さんが言っていたわ」
狗狼「え？」
ななみ「はじめはまほろ目当てだったのに、だんだん狗狼君が気になっているのね」
狗狼「なんで？」
ななみ「委員長って子は今日会ったけど、狗狼君とのことチャカされたら真っ赤になって怒っていたわ」
狗狼「委員長は怒りっぽいんだよ」
ななみ「まほろは、きっと自分の気持ちに気が付いて無いけど、もう任務なんか関係なく貴方に尽くしたいと思っているわね」
狗狼「メイドの仕事だからだろ？」
ななみ「やっぱり狗狼君死になさい！　最悪よ！」

背負われながら後ろから狗狼の首を絞めるななみ。

狗狼「よせっ、本当に死ぬっ！」
ななみ「・・・・・・そうね。貴方が死ぬともう皆が悲しむから、辞めておくわ」
狗狼「・・・・・・」
ななみ「きっと、私も悲しい」
狗狼「・・・・・・今の生活、与えてくれて感謝しているよ。ななみさん」
ななみ「うん、よろしい」

ーーー

まほろ「狗狼さんは身体能力も高く、いざと言うときに周りを助ける心をお持ちです。それが女性にどう言う目で映るのか、全く自覚がありません！」
狗狼「助けるって、俺は目の前でひとが危ないのを見過ごせないだけだよ」
まほろ「狗狼さんの良いところです。そこはいいのですが、誰彼かまわずお優しいと気が気でなりません」
狗狼「なんで？」
まほろ「それは、何でって、私に戦うなって言ってくれたからです！　え、・・・・・・あれ？　私何言っているのでしょう。もう部屋で休みますねっ」
狗狼「え、まほろさん？」

顔を真っ赤にして居間から逃げていくまほろ。
しかし、狗狼に手を握られ引き止められる。

まほろ「く、狗狼さん！？」
狗狼「まほろさん」
まほろ「え、え、いくら二人っきりとは言え、そんな」
狗狼「いいの？」
まほろ「ええ！？　え、エッチなのはいけないと思います！」
狗狼「まほろさんが楽しみにしていた、ヒッチコック特集。始まっちゃうけど、見ないの？」
まほろ「・・・・・・え、ヒッチコック」
狗狼「そりゃサスペンスだから多少はそういうシーンはあるけど、見たいって言ってたのに」
まほろ「見ます！　見ますよー。あははは」

手を離す狗狼。

まほろ「あ・・・・・・」
狗狼「ん？　どうかしたの」
まほろ「い、いいえ、始まる前に何かつまめるものを用意しますねっ」

顔を赤くしたまほろがキッチンへ逃げていく。居間に残されて紅茶を飲む狗狼。

狗狼「今日はなんか無性に疲れた。・・・・・・まぁ騒がしくて、これもまたいい、か」

まほろさんが、消費した命
　5年6ヶ月と2日

まほろまてぃっく　～癒されしセカイ～　2．5話　『猫たちの饗宴』　ＥＮＤ

――――――

3話　『終局への旅』

まほろまてぃっく

～癒されしセカイ～

――――――

ヴェスパー最強のアンドロイドであったＶ１０４６－Ｒと同型。マシューよりＶ１０４６－Ｒをヴェスパーが授かった時に共に受け取っており、封印され続けていた。Ｖ１０４６－Ｒとは別個体であるが、その性格はほぼ変わりは無い。清く正しい、優しい性格をしている。

浜口　みなこ　ハマグチ　ミナコ　（１４）
狗狼のクラスメイト。母からまほろの事を聞かされており、まほろに対して強い憧れを持っている。見目と性格は、幼い頃の母みなわと瓜二つ。

スラッシュ
かつてＶ１０４６－Ｒ　まほろのサポートメカだった記憶を受け継ぐスラッシュ。Ｖ１０４６－Ｒ　まほろと最後を共にした瞬間までの記憶が保存されている。

寺島　玲子　テラシマ　レイコ　（１４）
生まれも育ちも緋立市であるが純粋なセイント。狗狼やみなことクラスメイトであり、クラス委員長。曲がったことが大嫌いで、思い込んだら即行動。非常に活発な子である。自分の性格がセイントらしくない事を気にしている。母を管理者に殺された経緯を持つが、狗狼の過去を理解し受け入れた。

安藤　ななみ　アンドウ　ナナミ　（２０代）
ヴィナス所属。かつて管理者の下で洗脳を受け７７３と呼ばれていた彼女は、９９９の未来を案じている。Ｖ１０４６－Ｓ　まほろの上司となる。ななみの言う「大佐」とは美里優の事だが、彼の最終階級は「少将」。ななみが間違えている。

等々力凛　トドロキ　リン　（３０代）

美里優とは幼なじみ。巨乳とロングヘアがトレードマークのマイペース娘。現在は、狗狼の通う中学の教師。独身。

サウザンド　（１４）
管理者で育てられた戦闘用人造人間。人間を殺す以外の知識はあまり持っていない。狗狼に強い執着を持っている。黒いゴシックロリータに身を包み行動する。

帆風博士　ホカゼ（４０代）
マシューより授かったまほろの管理を担う科学者。以前は９１と呼ばれ管理者にいた。

――――――

ななみ「（私が姉妹と同じ様に片づけ上手とは限らない訳で・・・・・・）」

部屋の電気をつけると、まったく片付けてない女性の一人暮らしの惨状。

ななみ「狗狼君を上げてお茶でもと言う展開も無理。これじゃあ本当に凛さんまで秒読みね・・・・・・」

何か気配を感じ振り返ろうとするななみ。しかし後ろから押さえつけられ壁に押し当てられる。

ななみを押さえつけたのは、黒いゴシックロリータに身を包んだサウザンドだった。

サウザンドは片手だけで後ろからななみを押さえつけているが、ななみは身動きできない。

サウザンド「おかえり、773。なにかいいことあった？　御機嫌ね」

ななみ「・・・・・・サウザンド。生きていたの」

サウザンド「スリーナインの治療、終わるまで待っていた。やっとまた、スリーナインと人を殺す生活に戻れる」

サウザンドはななみの顔に手を這わせて、眼球をそっと撫でる。

ななみ「バカなことはやめなさい。狗狼君、999はマインドコントロールが解けて、やっとまともな生活を送っているのよ。貴方だってヴィナスで治療を受ければ、マインドコントロールから開放されるわ」

サウザンド「・・・・・・うるさい」

眼球に這わせていた指に力がこもる。

サウザンド「サウザンド、２ヶ月間よく調べた。スリーナインを監視している女アンドロイドがいる。ヴェスパー最強のアンドロイドまほろ。９１の元で封印され続けて、スリーナイン監視のために活動を始めた。今はお前、７７３の管理下にある」

ななみ「・・・・・・」

サウザンド「サウザンドは、あの女がいるとスリーナインに近づくことは出来ない。あの女の『輝ける闇』は、星を砕く力がある。サウザンド勝てない。でも」

ななみの眼球をやさしく撫でる。

サウザンド「７７３の、この瞳があれば、『輝ける闇』は手に入る。そうなのよね？」

ななみ「！！」

――――――

えていく。

ななみ「・・・・・・アサシンステルス」

サウザンド「スリーナインと違ってサウザンドは暗殺専門。セキュリティを抜けるのは容易。おかげで死んだと見せかけて隠れていれた」

ななみ「（だからヴィナスの情報網に掛からずに、生き抜いてこれたと言うわけね・・・・・・）」

――――――

セキュリティ『ＩＤ１０００００５４６８９７３６　安藤ななみ　確認』

ドアが開き、暗い部屋に多くの端末の光がともっているのが解る。
そして中央に鼓動のように点滅する青白い光がある。

サウザンド「ヴェスパーは、マシューより分身を受け取った。１体目は隕石を砕き、マシューの元へ戻った。２体目はスリーナインの監視のために目覚め、今も活動している。そして、３体目は・・・・・・」

サウザンドが壁のスイッチを入れると、中央のカプセルがライトで照らされる。
中には青白く点滅するエネルギーの球体。そのエネルギー体よりコードのようなものが延び女性のものと思われる手首が繋がっている。

サウザンド「Ｖ１０４６－Ｔ　まほろ。万が一の事態に備えて、溶解処分されてしまった」
ななみ「その通りよ。もうＶ１０４６－Ｔ　まほろは存在しない。帆風博士が苦渋の選択として処分してしまった。もう地球にこれ以上の力を残しても争いの火種になりかねない。これはマシューも承諾していること」
サウザンド「でも、地球の技術ではアンドロイド部分の溶解しか不可能だった。結果として兵器だけが残ってしまった。だからもう一体を処分せずにお前に託したと言うわけね」
ななみ「貴方が例え管理者で改造を受けているとしても、これを扱うことは不可能だわ」

サウザンドは右手にグローブを装着する。

サウザンド「このグローブ、９１を監禁して作らせた制御システム」
ななみ「帆風博士が！？　博士は無事なの！？」
サウザンド「お前の車のトランクの中。まだ生きているはず。『輝ける闇』の起動に、７７３を付き合わせると言ってある。下手な細工をさせないために」

サウザンドはエネルギー体の中にグローブをした手を差し込む。

サウザンド「んっ・・・・・・！」

エネルギー体はグローブの中に入って行き、グローブが光り輝く。
コードで繋がっていた手首が砂となって崩れ落ちる。
グローブより、ソードの様に『輝ける闇』を出して見るサウザンド。

サウザンド「『輝ける闇』。星を砕く力・・・・・・。これであの女と戦える」
ななみ「い、行かせません」

ななみは隠し持っていたヴィナス携帯用小型ブラスターを構える。

サウザンド「銃を向けると言うことは、殺すか、殺されるかと言うこと。サウザンドは好きだよ、そういうの」
ななみ「そのグローブを外して、床に置きなさい！　ここでマインドコントロールを解除する治療を受ければ、狗狼君と、９９９と普通に暮らすことだって出来るのよ」
サウザンド「・・・・・・・何も」
ななみ「・・・・・・？」
サウザンド「何も解ってない」

『輝ける闇』が揺らいだかと思うと、銃を握っていたななみの両手

首が切り落とされた。

ななみ「！」

サウザンド「普通って、何？　サウザンドには解らない」

ななみは膝を付き、うずくまる。

サウザンドは、ななみに顔を近づけて囁く。

サウザンド「773、貴方は役に立った。殺さないでおいてあげる。嬉しい？」

去っていくサウザンド。意識を失い、音も無く倒れこむななみ。

――――――

かったことですね」
みなこ「私が実家に帰っているときにズルイです」
狗狼「ズルイって、朝4時半までやってる深夜特集だよ。みなこちゃんいつも9時には寝ちゃうじゃん・・・・・・」
玲子「9時は早すぎなんじゃないの、みなこちゃん・・・・・・」
みなこ「ふ、普通です」
まほろ「来週は第2弾ですよ！　また見ましょうね、狗狼さん。いってらっしゃいませ」
狗狼「来週もあるのか・・・・・・はは・・・・・・。いってきます、まほろさん」
まほろ「はい。皆さん、お気をつけて」

笑顔で送り出すまほろ。3人は坂を下って学校へ向かう。

まほろ「んー、いいお天気です。さぁお洗濯しちゃいますよー」
スラッシュ「行って来るぜ、まほろ」
まほろ「よろしくお願いしますね、スラッシュ。狗狼さんが無茶しないか、みなこちゃんが転ばないか、委員長さんが暴走しないか、ちゃんとフォローお願いしますね」
スラッシュ「オレっちの役目が微妙に変わっている気もするんだが・・・・・・。まぁ、狗狼が変わったしな。当初の危うさは、もう奴から感じない」
まほろ「狗狼さんは始めからお優しい方でしたよ」
スラッシュ「お前がそう信じてやったから、アイツは変わることが出来たんだろうよ。まほろ」

3人を追って姿を消すスラッシュ。

スラッシュ「あんまり、みなこ達の前でイチャイチャするなよ。教育に悪い」

まほろ「スラッシュ！　いいい、いちゃいちゃなんてしてませんよ！？　どうしてそうなるんですかー！」
どり「あうあうあうあう」
まほろ「うー。行ってしまいました」
？？？『・・・・・・Ｖ１０４６－Ｓ・・・・・・』

まほろ「？」
どり「きゅーん、はっはっは」
まほろ「何か言いましたか、どりちゃん」
どり「あうあうあうあう」
まほろ「おかしいですね。あ、お洗濯をはじめる時間です。今日も頑張っていきまっしょい！です！」

――――――

――――――

傷だらけのスラッシュが力尽きて倒れこむ。

スラッシュ「て、てめぇ・・・・・・クッ・・・・・・管理者の・・・・・・残党」

サウザンド「・・・・・・」

スラッシュ「ま・・・・・・ほ・・・・・・」

サウザンドは丘から見える美里家の辺りを睨むと、跳躍して去る。

――――――

美里家周辺は光に包まれる。

――――――

みなこ「狗狼さん、バレない内に起きてください。狗狼さん」
狗狼「んー・・・・・・」

ーーー

交えた二人の刃が、威力を増し、巨大な二本の柱が天を抜ける。

ーーー

まほろT「私は、他の分身には無い『未来感知能力』を授かっていました。私の見た未来は、『私は悪の手に落ち、V1046－S
まほろ　貴方と戦うことになる未来』でした。・・・・・・過ぎた力は、人間の欲を掻き立ててしまいます」
まほろ「他にその未来を止める方法は無かったのでしょうか・・・・・・悲しすぎます」
まほろT「いいのですよ。生命が子をなす際、何億もの分身の中から、たったひとりが生まれる。私の生きる可能性の全てを貴方が受け継いでくれた。それで良いのです。・・・・・・ですが、マシューが万能ではないように、私の授かった未来予知も万能ではありません。現に、形は違っても、私たちは戦うことになってしまった」
まほろ「ではサウザントと言う子の使っている『輝ける闇』は・・・・・・」
まほろT「そう、私です。『輝ける闇』は兵器であり、私たちの魂そのもの。地球の技術では、私を完全に溶解することは不可能でした。そして今、彼女の持つグローブにその力を宿し、『輝ける闇』を発生させています」
まほろ「止めなくてはいけませんね」
まほろT「私は、私の魂は、もうマシューの元へ帰るのを待つだけ。私はもういいのです。・・・・・・この子を、サウザンドを救ってあげて」
まほろ「あの子を・・・・・・」
まほろT「サウザンドに魂を奪われた際に、この子の心の全てを見ました。管理者によって育てられたサウザンドの心は、深く悲しく、壊れてしまっている」
まほろ「サウザンドも過去の狗狼さんと同じ様にマインドコントロールされているのですね」
まほろTは悲しい目して顔を振る。

まほろＴ「サウザンドは、マインドコントロールを受けていません。管理者での生活の中で、人間を殺す以外の選択肢を与えられずに育てられてしまった。だから彼女はそれ以外を知らない。彼女の行動は全て自分自身の意思」
まほろ「・・・・・・そんな・・・・・・」
まほろＴ「私の『未来感知能力』を持ってしても、彼女をどうしたら救えるのか。見えませんでした・・・・・・。でも貴方なら、きっとそれが出来るのだと思います」
まほろ「私が、ですか」
まほろＴ「清く正しい心を『普遍』で維持した１体目。マシューの持つ『未来感知』の一部を授かった私、三体目。そして、マシューの与えた清く正しい心にとらわれず、変わり『進化』して行くことの出来る二体目の、貴方」
まほろ「清く正しい心から変わる・・・・・・？」
まほろＴ「貴方にしか、出来ないことです」

――――――

」
生徒Ｂ「本当に大変な事態なのかも」
凛「はーい、それでは出席番号順に廊下に並んで。委員長、点呼を終えたら私に報告」
玲子「はい、皆いきましょう」

生徒達は席を立ち始める。
狗狼は光の柱をまだ見つめている。その様子を不安に眺めるみなこ。

ーーー

りと共にその場から消える。
サウザンドの『輝ける闇』の刃は地面に振り下ろされ、大爆発をする。
美里家があった場所はクレーターの様にえぐられ、粉塵の中からサウザンドが出てくる。
瓦礫の山の辺りを見つめ、まほろがいない事を確認する。

サウザンド「倒した？　まさか・・・・・でも手ごたえはあった。無事ではない。あの女を数時間でも無力化できるなら、その間にクローと逃げられる。今行くよ。クロー・・・・・・」

サウザンドはその場から消える。
その場から少し離れた瓦礫の影。気を失ったまほろが倒れている。
まほろに抱きかかえられていたどりが這い出る。

どり「くぅーん」

――――――

ぐらいの、何か」

みなこは狗狼の制服のすそを掴む。

狗狼「今朝からスラッシュの気配を感じなかった。もっと早く気付くべきだった」

みなこ「・・・・・・」

狗狼「委員長と凛先生には言っておいてくれ。俺は行かなくちゃ」

みなこ「だ、駄目です」

みなこは掴んでる裾を離すまいと力いっぱい握る。

狗狼「みなこちゃん。俺、今の生活を守りたいんだ。みなこちゃんや、まほろさん、委員長も。皆を・・・・・・」

みなこ「・・・・・・狗狼さん」

狗狼「俺の力はそのためにあるんじゃないかって思えるようになった」

みなこは止められない自分がもどかしく涙を流す。

狗狼「その事に気づかせてくれたのは、まほろさんだ。まほろさんがもし戦っているのなら、助けに行きたい」

みなこ「・・・・・・」

狗狼「今までありがとう、みなこちゃん」

みなこ「・・・・・・いやぁ・・・・・・なんでそんな事言うんですか。もう帰ってこないみたいに・・・・・・」

狗狼「（まほろさんが戦っているのだとしたら、管理者終期の戦闘用人造人間。俺と同じキルマシーンクラス・・・・・・）」

来ない二人を心配して教室内を見に来る委員長。

玲子「何してるの、皆廊下に並ぶのよ。ちょっと、みなこちゃん泣いてるの！？」

委員長の声に、涙を拭くために手を離したみなこ。その隙に窓枠に飛び乗る狗狼。

狗狼「委員長、お母さんのこと本当にすまなかったな」

玲子「・・・・・・・え？」

窓から飛び降りる狗狼。

みなこ「必ず、必ず戻ってきてください！　狗狼さん！！」

――――――

――――――

瓦礫影に倒れていたまほろが目を覚ます。

どり「きゅーん」
まほろ「どりちゃん・・・・・・・」

辺りを見回すまほろ。

まほろ「家も、紫陽花も、お洗濯物も、全部なくなってしまいましたね・・・・・・」
どり「きゅーん」

どりがすすで汚れてしまったまほろの顔をなめる。

まほろ「心配しなくていいですよ、すぐに全て元通りになります」

瓦礫がきしみ、二階にあったクローゼットが、へしゃげてまほろの綺麗なメイド服が大量に出てくる。

――――――

狗狼「（サウザンドが戦えば、確実にこいつらを殺してしまう。俺が何とかするかねぇな）」

接近武器を持ったヴィナス特殊戦闘部隊5人が同時に狗狼に飛び掛ってくる。

狗狼は全ての接近武器による攻撃を回避し、5人全てのみぞおちに拳を入れる。

5人が吹き飛ばされていく中、次のヴィナス特殊戦闘部隊5人が小銃をフルオートで撃ちながら突撃してくる。

狗狼は弾丸を掻い潜り、5人の小銃を叩き落とし、顎を蹴り上げる。

無表情で狗狼の戦いを見つめているサウザンド。

――――――

狗狼達が心配だ」
まほろ「スラッシュはここでどりちゃんを頼みます。すぐにヴィナスが回収してくれるはずです」
スラッシュ「そうか、行くんだな。こんな時に、役に立てねぇ・・・・・・俺はまた」

まほろはスラッシュを抱きしめる。

まほろ「無事でよかった」
スラッシュ「・・・・・・死ぬんじゃねぇぞ、まほろ」
まほろ「いってきます。サモン・ザ・シルフィード！」

まほろ専用高速飛行ユニットが飛んでくる。

――――――

狗狼「人を殺したら、それだけ自分の心を殺すことになるからだ。サウザンド、お前にも解るだろ」
サウザンド「サウザンドもクローも、もういっぱい殺している。今更そんなことを言われても、滑稽だよ」
狗狼「一人一人の命は、家族がいて、友人がいて、愛されて、生きているんだ。誰一人死んでいいはずが無いし、殺していいはずもない」
サウザンド「でも、もう遅いでしょ。殺さなければ、私たちが殺される。だから殺し続けてきたんだよ」
狗狼「・・・・・・サウザンド。もう、殺さなくていいんだ。俺たちは、殺さなくても生きていけるんだ」
サウザンド「そんなの嫌だよ！　人を殺さないクローなんか、クローじゃない！」

サウザンドは『輝ける闇』を狗狼に突きつける。

サウザンド「どうして・・・・・・どうしてクローはそんなことを言うの。解らない。サウザンド解らないよ」
狗狼「俺は解ったんだ。人の心に触れて生きていくことが、どんなに大切か。サウザンド、君にも解って欲しい」
サウザンド「解らない・・・・・・解らないよ。だって、そんな心があるだなんて認めたら、私・・・・・・私」
狗狼「一緒に罪を抱えて生きていこう。決して誰からも許されない。だけど償いながら生きていくんだ」
サウザンド「いや・・・・・・嫌だよ。クローは誰よりも人を殺すの。そしていつか私も殺してくれる」
狗狼「サウザンド・・・・・・、君は俺そのものだ。俺の心が皆に救われたように、君も必ず」
サウザンド「だ・・・・・・黙れ！！」

振り下ろされる『輝ける闇』
狗狼は、サウザンドに接近し、グローブの腕を受け止める。
『輝ける闇』は中学校の上部分を破壊する。

サウザンド「いっぱい殺して、最後はクローが私を殺して開放してくれる！　それだけが私の希望だった！」

サウザンドは『輝ける闇』を振り回し、周りをどんどん破壊していく。
必死にサウザンドの腕を押さえる狗狼。
しかし、サウザンドは狗狼を振りほどき、『輝ける闇』で狗狼の脇腹を射抜く。

サウザンド「あ・・・・・・・あぁ・・・・・・・」
狗狼「うっ・・・・・・・」

片膝を付く狗狼。
まほろがシルフィードから飛び降り校庭を走ってくる。

まほろ「狗狼さん！」

倒れ掛かる狗狼を抱きとめるまほろ。

サウザンド「あぁ・・・・・・・あぁぁあああああ！！！」

サウザンドは『輝ける闇』の刃を巨大にして、地面に何度も叩きつける。

サウザンド「星を砕く力があるなら、地球が壊れればいい！　皆死ねばいいんだ！　あああああ！！！」

まほろは厳しい目でサウザンドを見据える。
狗狼「まほろさん・・・・・・・逃げて・・・・・・・戦ったら・・・・・・・いけない」
まほろ「狗狼さん・・・・・・・」

まほろはそっと、狗狼を横にすると、サウザンドへ向かって歩いていく。

サウザンド「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
まほろ「サウザンドさん」
サウザンド「・・・・・・・お前が、お前がクローを変えちゃったんだ・・・・・・」
まほろ「狗狼さんは元々優しい心をお持ちの方です。それは、貴方にもある物ですよ」
サウザンド「嫌ぁ、・・・・・・・私には、私にはそんなものない」
まほろ「今は、悲しく傷ついて、壊れてしまっています。でも貴方の中にも必ずあります」
サウザンド「私は誰でも殺せる。何人でも殺せる。殺したいから殺すの！　そして最後はクローに殺してもらう！」
まほろ「辛くないのなら、なぜ自らの死を望むのです！」
サウザンド「！」
まほろ「自分を壊すことで、人を殺すことを受け入れてきたのですね。もう、そんな無理をする必要はありませんよ」
サウザンド「・・・・・・・いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

サウザンドは、まほろに『輝ける闇』を振り下ろす。まほろも『輝ける闇』で受け止める。
サウザンドは『輝ける闇』を最高出力にする。まほろもまた、同じ

出力を出す。
辺りが凄まじい光に包まれる。

サウザンド「何なんだ・・・・・・、お前、私の何が解るって言うんだ・・・・・・！」
まほろ「ただ、貴方の心を信じたいんです。・・・・・・貴方を救う方法を、色々考えましたが、私にはこれしか出来ないみたいです」

狗狼は脇腹を抱え、立ち上がる。

狗狼「まほろさん・・・・・・駄目だ・・・・・・」
まほろ「・・・・・・・狗狼さん。約束を破ってしまって、ごめんなさい・・・・・・。私、優しい貴方が大好きでした」
狗狼「！」

周りの割れた地面が吹き飛ぶほど、二つの巨大な刃の交差は威力を増す。
そして、突如サウザンドの『輝ける闇』が砕け散り、光があふれ天空へと飛び立つ。

サウザンド「！？」

まほろの『輝ける闇』も砕け散り、まほろの体から光があふれ、天空へと飛び立つ。

狗狼「！！！」

――――――

避難所、公園。
中学校の生徒や、付近の住民も避難している。
光が昇っていくのを見る、みなこ、玲子。

玲子「・・・・・・・綺麗・・・・・・」
みなこ「・・・・・・・お姉ちゃんの・・・・・・・光・・・・・・・」

涙しながら空を見つめるみなこ。

――――――

上げられるサウザンド。
狗狼の目は、恐ろしいほど冷酷に、サウザンドを見る。
狗狼は、サウザンドの首を絞める手に、力を込める。

サウザンド「・・・・・・ク・・・・・・ロー・・・・・・帰ってきた・・・・・・」
狗狼「・・・・・・」
サウザンド「・・・・・・殺し・・・・・・て・・・・・・」
狗狼「・・・・・・」
サウザンド「・・・・・・」

サウザンドは痙攣し始める。狗狼は、手を離さない。
狗狼は、ゆっくり目を閉じる。
ななみ、どり、スラッシュ、みなこ、委員長、凛、そして紫陽花の花に囲まれ微笑むまほろが狗狼の脳裏をよぎる。
ゆっくり、サウザンドを降ろす。咳き込み息をするサウザンド。

狗狼「・・・・・・」
サウザンド「う、うぅうあぁぁぁぁぁぁん、あぁぁぁああん」

声を上げて泣くサウザンドの横で、魂の抜けたまほろを抱きしめる狗狼。
中学校は半壊し、校庭は切り刻まれたクレーターの様になっている。
上空には、ヴィナスの全戦力の航空機が旋回し、地上も全てヴィナスの軍に囲まれている。
まほろを抱きしめたまま意識が薄れ、倒れこむ狗狼。

狗狼「これが・・・・・・罪の・・・・・・代償か・・・・・・」

まほろまてぃっく　～癒されしセカイ～　３話　『終局への旅』

ＥＮＤ

４話へつづく

4話　『火星年代記』

まほろまてぃっく

～癒されしセカイ～

―――――――

見た目年齢１６～１８）
ヴェスパー最強のアンドロイドであったＶ１０４６－Ｒと同型。マシューよりＶ１０４６－Ｒをヴェスパーが授かった時に共に受け取っており、封印され続けていた。Ｖ１０４６－Ｒとは別個体であるが、その性格はほぼ変わりは無い。清く正しい、優しい性格をしている。

浜口　みなこ　ハマグチ　ミナコ　（１４）
狗狼のクラスメイト。母からまほろの事を聞かされており、まほろに対して強い憧れを持っている。見目と性格は、幼い頃の母みなわと瓜二つ。

スラッシュ
かつてＶ１０４６－Ｒ　まほろのサポートメカだった記憶を受け継ぐスラッシュ。Ｖ１０４６－Ｒ　まほろと最後を共にした瞬間までの記憶が保存されている。

寺島　玲子　テラシマ　レイコ　（１４）
生まれも育ちも緋立市であるが純粋なセイント。狗狼やみなことクラスメイトであり、クラス委員長。曲がったことが大嫌いで、思い込んだら即行動。非常に活発な子である。自分の性格がセイントらしくない事を気にしている。母を管理者に殺された経緯を持つが、狗狼の過去を理解し受け入れた。

安藤　ななみ　アンドウ　ナナミ　（２０代）
ヴィナス所属。かつて管理者の下で洗脳を受け７７３と呼ばれていた彼女は、９９９の未来を案じている。Ｖ１０４６－Ｓ　まほろの上司となる。ななみの言う「大佐」とは美里優の事だが、彼の最終階級は「少将」。ななみが間違えている。

等々力凛　トドロキ　リン　（３０代）
美里優とは幼なじみ。巨乳とロングヘアがトレードマークのマイペース娘。現在は、狗狼の通う中学の教師。独身。

サウザンド　（１４）
管理者で育てられた戦闘用人造人間。人間を殺す以外の知識はあまり持っていない。狗狼に強い執着を持っている。黒いゴシックロリータに身を包み行動する。

帆風博士　ホカゼ（４０代）
マシューより授かったまほろの管理を担う科学者。以前は９１と呼ばれ管理者にいた。

その他
原作に登場したさまざまなキャラクター。書ききれないので原作必読。

―――――――

緋立市、上空。（夕）
ＴＶ局の撮影ヘリが飛び交う。
中学校の校庭にはブルーシートが張られているが、上空からは切り刻まれた大地が見える。

――――――

当然の行いをしたまでです』とコメントを・・・・・・」
リポーターＥ「緋立中学校復興支援基金を開設しました。募金してくださる方々は当番組のＨＰにて・・・・・・」

ーーー

ーーー

狗狼「ちょいと強行突破してきた。腕、大丈夫なの？」
ななみ「ええ、ヴィナスの再生医療で完全にくっついたわ。って、私のカルテ盗ってきたの？」
狗狼「心配だったからな。肝機能注意、飲みすぎだなこれ」
ななみ「ちょっ、人のカルテ見るのやめなさい。貴方こそ、お腹を刺されたと聞いたわ」
狗狼「なんとか平気みたいだ。まだ塞がりきってねぇけど」
ななみ「無茶しないで、病室に帰りなさい」
狗狼「・・・・・・マインドコントロールを受けていなかったサウザンドを、ヴィナスはどうする気なんだい？」

ななみは、真剣なまなざしで答える。

ななみ「・・・・・今は、管理者末期の資料が多く集められていて、彼女を取り囲んでいた生活の全てが、選択肢の与えられない一種のマインドコントロール状態だったと立証できるかもしれない。そうすれば、何年かは掛かるけれど、普通の生活に戻ることが出来るはずよ」
狗狼「そうか。いざとなったらとか考えていたけど・・・・・・なら、ヴィナスと敵対する必要はなさそうだな」
ななみ「私が立証して見せるわ。あの子だって、妹だもの・・・・・・」
狗狼「腕を切られたのに、優しいな、ななみさんは」
ななみ「いつか、あの子が人間性を取り戻して、自分の行いに後悔した時・・・・・・まず私が許してあげないとね」

狗狼は、「貴方の心を信じたい」とサウザンドに語ったまほろを思い出す。

狗狼「安心したよ・・・・・・安心して、出て行ける」

ななみ「・・・・・・そう」
狗狼「落ち着いて、色々考えたい。旅に出ようと思う」
ななみ「また、貴方はひとりになってしまうのね」
狗狼「・・・・・・いつか、必ず戻ってくるよ」
ななみ「まほろのこと・・・・・・好きだったの・・・・・・？」
狗狼「まほろさんは、光になる前に、俺のことを好きだと言ってくれた。俺は、彼女に何も言えてない」
ななみ「顔を見せて、狗狼君。下見無い！」

下を見ないように振り向く狗狼。

ななみ「みなこちゃんも、あの委員長さんも、私も。皆貴方のことが大好きよ。早く戻ってきてね」
狗狼「ありがとう、・・・・・・姉さん」
ななみ「またね、弟君」
どり「くぅーん」
狗狼「あぁ、どりも元気でな」

――――――

ことが出来なかった」
狗狼「・・・・・・」
スラッシュ「悔やんでも、悔やみきれねぇ。サポートメカとして失格もいいところだ」
狗狼「・・・・・・そうか」
スラッシュ「オメェは、マスターだ。ついていくぜ」
狗狼「勝手にしろ」
スラッシュ「ｏｋ　ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ」

スラッシュは、姿を透けさせ消えていく。

――――――

帆風「狗狼君、だね」
狗狼はスラッシュを引き剥がし服を調え、車から声をかけてきた帆風を睨む。
帆風「まほろを失い、傷心の旅立ちか？　どこに行こうとも、何も変わりはしない」
狗狼「・・・・・・」
帆風「単刀直入に聞こう。君は、まほろを取り戻す意思はあるか」
狗狼「！？」

――――――

ントの本星のマシューの元だろう」
狗狼「そんなのどうやって・・・・・・」
帆風「火星の『地球セイント統合政府』本部中枢に、唯一マシューとの国交を開くことの出来るゲートがある」
狗狼「ゲート？」
帆風「距離と時間を越えて魂と魂を繋ぐ門、『Ｈ・Ｔ・Ｈ』。成功被験者はただ一人、みなわ君・・・・・・。君には、みなこ君の母親と言ったほうが解りやすいか」
狗狼「『Ｈ・Ｔ・Ｈ』、聞いた事がある。昔、ヴィスパーが管理者本島に対して放ったジャミング兵器じゃないのか」
帆風「みなわ君の心が、管理者本島の制御システムを凍結したんだ。より強い想いと想いが繋がることによって、初めて成功する」
狗狼「どんな方法でも構わない。まほろさんが戻ってくるなら、俺は何だってやる」
帆風「みなわ君の時とは規模が違う。火星からセイント本星まで５００億光年以上離れている・・・・・・君ひとりの想いでは届きはしない」

シャトル入り口に、メイド服を着たみなこと玲子が待っていた。

みなこ「狗狼さん！」
玲子「やっと来たわね」
狗狼「みなこちゃん、委員長・・・・・・！？」
帆風「僕が呼んだ。まほろや君に近しい彼女達の協力が必要なんだ」
狗狼「なんで、二人ともメイド服なんだよ」
みなこ「『メイド服は戦闘服』ってお姉ちゃんが言ってました。お姉ちゃんを取り返す戦いだって聞きいたんです。私も戦います！」
玲子「私だってあのメイドさんに戻ってきて欲しいわ。このメイド服縫ってくれたのもメイドさんだし、みなこちゃんも着ていくって言うから」

帆風「勇ましい子達だ。だが、君達に危険なことはさせないよ。その分、狗狼君には頑張ってもらうがね」
狗狼「・・・・・・ああ」
帆風「これから行うことはセイントにとっては禁忌。地球人にとっては犯罪だ。覚悟して欲しい」
狗狼「・・・・・・アンタ、ヴィナスの人間なのか？」
スラッシュ「この人は、帆風博士。まほろのメンテナンスやサポートメカの管理をしていた科学者だ」
帆風「寿命をすり減らしながら戦い続けたＶ１０４６－Ｒ。不幸な未来を知り自ら溶解処分を願い出たＶ１０４６－Ｔ。そしてサウザンドの『輝ける闇』を滅するため力を使い果たしたＶ１０４６－Ｓ。彼女達に課せられた運命は余りにも残酷だった。僕は何もすることが出来ず、ただ指を咥えていただけだ。・・・・・・もう許せないんだよ。彼女達に無慈悲な運命を与えたマシューと、それに抗おうとしなかった自分がね」
狗狼「解った・・・・・・アンタの言う通りにしよう」
帆風「君達はこのシャトルで火星に行ってもらう。『地球セイント統合政府』本部前で協力者を待たせてある。合流して行動してくれればいい」
狗狼「アンタはどうする」
帆風「僕はまだ地球でやることがある。狗狼君、君の想いに賭ける。・・・・・・まほろを、頼んだよ」
帆風が手を差し出す。握手をする狗狼。
狗狼「感謝するよ。帆風博士」
――――――

恒星間シャトル発着場。日の出。
マスドライバーにて打ち上げられるシャトルを見送る帆風。

帆風「・・・・・・すまないな、残ってもらって」
スラッシュ「オレっちは、狗狼の奴が死のうとでもするんじゃねぇかと心配だっただけだ。あの分じゃ平気だろ」
帆風「ああ。急ごう、彼らが火星に到着するまでに、君にしか出来ない仕事がある」

――――――

スラッシュ「・・・・・なるほどな」
帆風「これを、Ｖ１０４６－Ｒ、Ｖ１０４６－Ｓ全ての関係者に渡して欲しい」
スラッシュ「全て・・・・・」
帆風「地球上で生活している全ての関係者に・・・・・だ」

――――――

携帯を切って、溜息をつく。

凛「今日は学校お休みか。まぁ当然だけどねぇ」

閉めてあるカーテンに、影が映り動く。

凛「誰！？」

スラッシュ「お嬢ちゃん、いるか。窓を開けてくれ」

窓を開ける凛。

凛「スラリンどうしたの？」

スラッシュ「こいつを受け取ってくれ」

スラッシュは、メッセージカードを出現させて咥え、凛へ差し出す。

受け取り内容を読む凛。

『Ｖ１０４６－Ｒ　まほろ　は、美里　優　と再会するまでに２０年の時を必要としました。

２０年もの間、美里　優は孤独な戦いをしいられました。

そして今、Ｖ１０４６－Ｓ　まほろ　と　狗狼　が同じ様に引き裂かれました。

もし、貴方が彼らの幸せを願ってくれるのなら

９月１４日から、９月１５日になる深夜０時より

３０分間、彼らのことを想い、祈って頂けないでしょうか。

貴方の祈りが、必ず彼らを救います』

凛「祈り・・・・・・？」

スラッシュ「神やら迷信の類じゃねぇ。『H・T・H』って言う意思伝達の装置さ。お嬢ちゃんが強く祈れば祈るほど、狗狼の想いをマシューへと届ける成功率が上がる」
凛「狗狼君が、あのセイントの神様のマシューへ！？」
スラッシュ「マシューから、まほろを取り戻すんだ」
凛「・・・・・・」
スラッシュ「お嬢ちゃん、アンタはどっちのまほろも知っている貴重な人間の一人だ。狗狼のこともよく理解してくれていた。アンタの祈りは、成功を左右する強いものになるとオレッチは信じている」
凛「解ったわ、スラリン。必ず祈る」
スラッシュ「ありがとうな、お嬢ちゃん。・・・・・・じゃオレッチはまだまだカード届けねぇと」

窓から出て行こうとするスラッシュ。

凛「スラリン！　美男子になんて変身出来なくても、スラリンは格好イイよ！　頑張ってね！」
スラッシュ「へッ、当然だ」

――――――

大江　千鶴子ＷＥＢサイト

『９月１４日　皆さんにおねがい！
１０００万部を越えた最新作小説の主人公とヒロインには現実にモデルがおり、
決して小説のようなハッピーエンドは迎えられませんでした。
そして今、同じ様に引き裂かれようとしている二人が居ます。
彼らをモデルに私は続編を書こうと思っております。
彼らの物語をハッピーエンドとするか、悲しいバッドエンドとするか、皆さんの想いにかかっています。
どうか、今夜０時より３０分間だけ、彼らの幸せを祈って頂けないでしょうか。
貴方の祈りが、ストーリィを動かすことでしょう』

――――――

街頭インタビューA「ブログ見ました！　今夜は友達と集まって祈ろうと思います！」
街頭インタビューB「次回作の宣伝でしょ？　でも前の好きだし祈っちゃうかも」
街頭インタビューC「え！　新作出るんですか。続編！？　祈るだけでいいの？！」
街頭インタビューD「モデルが本当にあの話に居るのだとしたら、悲しくて、幸せを祈らずにはいられません・・・・・・」
街頭インタビューE「何か続編出るって噂になっていたから、急いで前の買いにきたんですよ。5件売り切れでもう手に入らないかと思いました。今から帰って0時までに読み終えて、祈りに参加します！」

キャスター「出版社に問い合わせたところ、『ブログの件は、先生の個人のコメントであって、出版社では全く関与していません。もし新作ならば、我々にとっても嬉しいニュースです。祈らせて頂きます』と返答を送っていただけました。どう思いますか？」
コメンテイター「大江　千鶴子さんのブログは、いつもは食べ物について詳しく書かれていて、専門家顔負けの食通ブログなのですが、今回初めて作品について書いているんですよ。その辺に信憑性の高さが感じられますね。今回の記事に対して読者からのレスが1万件を越えていまして、そのほとんどが『祈ります』とのメッセージで埋まっています」
キャスター「今夜は私も祈ろうと思います。さて、次のニュースです・・・・・・」

――――――

火星、衛星軌道上。マスキャッチャー。
高速で飛行してくるシャトルと連結し、その速度を強制的に止める。
火星着陸軌道に修正され、連結が解除される。

――――――

玲子「なら、・・・・・・自分を許しなさいよ」
狗狼「・・・・・・」
玲子「アンタ見てると、許せない自分を傷つけ続けているようにしか見えないのよ。それは、償うこととは違うんだからね」
狗狼「・・・・・・それでも、許すことは出来ない」
玲子「・・・・・・ガキなんだから。じゃあ、代わりに目を瞑って、早く」
狗狼「え、こうか」

委員長は、顔を真っ赤にしながら狗狼に接近する。
みなこの携帯から着信音が流れる。

みなこ「うーん・・・・・・取らなきゃ」

狗狼が目を開けると委員長は離れた席で本を読んでいる。本の上下は逆。

狗狼「？」
みなこ「はい・・・・・・お久しぶりです。はい・・・・・・はい。解りました、皆に伝えます」
玲子「み、みなこちゃん。どうしたの？」
みなこ「はい、集合場所が変更だそうです」

――――――

みなこ「こっちです」

みなこの指差す先には、周りの近代的な建物に不釣合いなプレハブで作られた「火星食堂」と書かれた店。
みなこが入っていってしまうので、着いていく狗狼と委員長。
店構えとは裏腹に、中は結構繁盛している。
みなこが多くの客席をキョロキョロ見ていると、奥の座敷から声がかけられる。

???A「みなこちゃん、こっちだ」

それと同時に、その座敷に座っていた男が金を置いて、立ち上がる。

???B「交渉決裂だ」
???A「しょうがねぇな」

男はそのまま狗狼達の横を通り過ぎていく。

???B「戦士としての使命があるのだ、許せ」

狗狼達に言った様だったので、怪訝な顔を付き合わせる3人。

???A「みなこちゃん、牡蠣鍋うめぇぞ。まぁ座れや」
みなこ「おじさん、お久しぶりです」

少々荒っぽそうな男が、隣に座ったみなこの頭をガッシガッシと撫で回した。

???A「久しぶりだな、3年ぶりか。そんな格好してるとみなわ

ちゃんそっくりだ。はまぢの奴、元気か？」
みなこ「はい、元気です。母も父も会いたがっていました」
向かい側に座る狗狼と玲子。テーブルには牡蠣鍋が煮えている。
みなこ「あ、ご紹介します。このおじさんは、母の姉と結婚した美里　優さんです」
優「そう。みなわの姉であり、今出て行った地球セイント統合政府警備主任の娘でもある女性と去年結婚した、美里　優だ」
玲子「は、はじめまして。寺島　玲子です」
狗狼「美里　優・・・・・・。元ヴィナス所属。管理者終期、フェルドランスさんを倒した男。俺の建前上の保護者だな。はじめまして、美里・・・・・・狗狼だ。すまない、他に名乗れる苗字がない。使わせてもらっている」
優「気にするな。ななみや帆風博士から話は全部聞いている」
みなこ「じゃあ、おじさんが協力してくれるんですか？」
優「本当はそんなつもりじゃなかったんだが、警備主任の頭が固すぎてな。説得して簡単に中に入れるようにしようとしたんだが、ワイロの鍋には手も付けず、鍋代まで置いていきやがった。やっぱ娘と結婚したの根に持っているのかな、ははは！」
玲子「豪快なおじさんね・・・・・・」
みなこ「おじさん、結婚して明るくなりましたね。前会ったときはちょっと怖かったです」
優「あの頃はまだ戦っていたからなぁ。今は退役してるし、ただのおっさんさ」
狗狼「これから、俺達はどうするんだ？」
優「地球セイント統合政府本部ビルを制圧。政府代表、最高議長の両名を拘束。まぁクーデターみたいなもんだ」
狗狼「みなこちゃん、このおっさん怖ぇぞ・・・・・・」
優「おいおい、狗狼。お前には俺にも出来なかったことをやり遂げ

てもらうんだ。これぐらいでビビってんじゃねぇぞ」
狗狼「ビビってなんかねぇ。まほろさんを取り戻すのに必要なら、政府だろうが星だろうが壊滅させてやる」
優「・・・・・・決まりだな」
玲子「え、え、何のためにクーデターなんですか」
優「火星にある『H・T・H』は、ヴェスパー時代に帆風博士が作ったものを、セイントの技術力を使って強力にした新型だ。当初マシューとの国交を開くために作られたんだが、結局成功することはなく地球セイント統合政府本部ビル中枢に封印されている。使用許可なんか下りる訳がない。なら、30分間強奪すればいいんだ。時間を稼ぐためにビルを完全制圧をする。『H・T・H』使用終了後に俺らは速やかに撤収。無事終電までに帰宅して妻にバレないようベッドに潜る。これがミッションの全容だ」
狗狼「・・・・・・」
みなこ「言ってきてないんですか」
優「ちょっとクーデターしてくるなんて言ったら怒られるからな。怒ると怖ぇぞ？　さ、牡蠣鍋食っちまおう。ワイロのつもりがタダ飯になっちまった。お前らも食え食え」
みなこ「あ、皆さんの取り分けますね」

――――――

ス最強戦士・・・・・・のはずだ）　む？」
定食屋を出た４人は、見覚えのある黒いフルフェイス、プロテクターを身に付けた、２０人の集団に囲まれる。
狗狼「ヴィナス特殊戦闘部隊！　追ってきやがってたか」
狗狼が身構えると、ヴィナス特殊戦闘部隊はヴィナス式敬礼をし、姿勢を正す。
コマンド「美里少将！　ヴィナス特殊戦闘部隊、全員参加させて頂きます！」
優「火星までご苦労だったな。だが、正規のヴィナスミッションじゃねぇ。帰りな」
コマンド「皆、ヴィナスに辞表を出してまいりました。プロテクターのマーキングも削りました」
優「そうか・・・・・・再就職のいいデモンストレーションとして、ここの警備主任に見せ付けてやるか」
コマンド「ありがとう御座います」
狗狼「アンタ達、この前はすまなかったな・・・・・・」
コマンド「いや、我々は美里少将の居ない今、地上最強部隊だと驕っていた。キルマシーンクラスの君と戦うことが出来、目が覚めた。感謝する」
優「ウェポンは打撃武器、捕縛武器限定。敵味方一人も怪我人を出すな。相手は容赦なく撃ってくるぞ。弾丸やレーザーは見て避けろ。俺が居た頃の訓練を思い出せ」
コマンド「了解」
優「俺と特殊戦闘部隊１８名は、各方面から同時奇襲をかけて、地球セイント統合政府代表　近衛　優一郎、最高議長　リーシャ両名を拘束する。狗狼達と特殊戦闘部隊２名は、本部ビル中枢の『Ｈ・

Ｔ・Ｈ』を目指せ」
特殊戦闘部隊Ａ「了解」
特殊戦闘部隊Ｂ「お連れします」
優「警備主任が出てきたら、俺に連絡しろ。お前らの敵う相手じゃない」
コマンド「了解」
優「んじゃ、２３：００突入。それまで休憩。お前らもここの牡蠣鍋食っとけ、うめぇぞ」
コマンド「美里少将のおごりだ、皆頂こう！」
特殊戦闘部隊全員「了解！」
優「う・・・・・・」
狗狼「・・・・・・」

――――――

優「・・・・・・俺の妻は、Ｖ１０４６－Ｒだった記憶を受け継いだ人間だ。Ｖ１０４６－Ｒ消滅後、彼女の記憶を持った赤子がマシューによって作られた。その赤子が２０年育つまで、俺はその事実を知らずに、消滅した彼女を想い戦い続けた」
狗狼「・・・・・・」
優「帰ってきたんだから、ありがたく思えっ言われればそれまでだが、２０年間の俺たちの引き裂かれ続けた想いはどうなるんだ」
狗狼「・・・・・・そうだったのか」
優「セイントの神と崇められるマシューってのは、そんなに偉いもんなんかな。俺たちの想いを弄びやがって、気付いた頃には、俺の殴れない遠くに逃げちまいやがってた」
狗狼「マシュー・・・・・・か」

優は、ジッパーを上げる。そして、拳を狗狼に突き出す。

優「狗狼、俺は今でもマシューを許しちゃいねぇ。お前が、俺の分もマシューをぶん殴ってくれるんだろ？」
狗狼「・・・・・・」

狗狼は頷き、優の拳に拳を当てる。

――――――

優と元ヴィナス特殊戦闘部隊１８人は、その場から消えたように見えるほど素早く地球セイント統合政府本部ビルを囲むように移動し、各個、外壁を爆破して催涙ガスを投げ込み潜入していく。

特殊戦闘部隊Ａ「狗狼さん、こちらです」
特殊戦闘部隊Ｂ「お嬢さんたち足元に気をつけて」

狗狼達は、特殊戦闘部隊２人に先導され、地球セイント統合政府本部中枢を目指す。

――――――

商店街に集まった客や店主達が頷く。人ごみを掻き分けて深雪の子の小雪（4）が出てくる。

小雪「まほちゃん居ないと寂しい！」
深雪「あら、アンタまだ起きてたの」

深雪が抱き上げるが、嫌がる。

小雪「こゆきもまほちゃんのために祈るのー！」
深雪「もう、今日だけだからな」

――――――

特殊戦闘部隊Ａ「時間がありません、我々が突入します」
狗狼「待て、俺が行く。みなこたちを連れて付いてきてくれ」

返事を待たず飛び出した狗狼は、弾丸を掻い潜り警備兵まで壁を蹴って跳躍する。
間合いを一瞬で詰められた警備兵は、近接戦闘ナイフを取り出すが、狗狼の蹴りの方が早く急所に決まる。
他の警備兵が状況に気づき、銃を向ける。と、同時に狗狼は銃をへし折り、鳩尾に膝をめり込ませる。
後ろに居た警備兵が足にレーザーカッターを出し、狗狼を蹴ろうとする。
しかし、頭上から巨大観葉植物の植わった鉢が落ちてきて潰される警備兵。気絶する。
観葉植物を落としたロングストレートの透き通る赤毛の女性が狗狼達に声をかける。

???「こっちよ」

――――――

ウィナス本部、留置施設地下。（夜）
分厚いドアを開けると、口しか開いて居ない完全拘束具を着せられ、椅子以外何もない部屋に座らされている者がいる。
全身も顔をも覆う拘束具で誰かは解らない。

スラッシュ「オメェで最後だ、サウザンド。・・・・・・祈るとは思えねぇが、関係者全員、だからよ」

サウザンドの座る足元に、メッセージカードを置いて、出て行くスラッシュ。
スラッシュが出て行くと、扉が閉まる。
椅子に座っていた拘束具は崩れ落ち、人は入っていない。
天井から飛び降りてきたサウザンド。メッセージカードを拾う。

――――――

スラッシュはどりの籠の横で、座り込む。

帆風「あぁ、理論上は地球全て場所からの祈りが拾えるはずだ。その全てを、ななみ君の想いの強さを媒介にして、火星の『H・T・H』に送り込む。向こうではみなこ君と玲子君がそれを受信してくれる」

ななみ「火星との交信は？」

帆風「まだだ。向こうの準備が整えば、連絡が来るはずだ・・・・・・」

何か匂いをかぎつけるどり。尻尾を振りながら部屋を出て行く。皆話していて気が付かない。

――――――

そのまま、優は警備主任の前に立つ。粉塵が切れ、姿を現す警備主任、流河　濤。

流河「待っていたぞ。戦士、美里　優」
優「事情は話したってのに・・・・・それでも駄目か、流河先生」
流河「お父さんと呼んでいいんだぞ」
優「勘弁してくれよ。おい、お前ら先に行っていいぞ」
コマンド「し、しかし」
優「大丈夫だ。この人は、俺と戦いたいだけだ」
流河「・・・・・よく解ったな、美里　優。戦士との戦いに雑音は無用。行くがいい」

走り抜けていくヴィナス特殊戦闘部隊。

優「全く・・・・・別に今じゃなくてもいいだろうが」
流河「今なら君は本気ではないのかね」
優「あぁ、・・・・・本気だ」

双方、剣を召還し握る。優と流河が静かに構える。

――――――

・・・・クロー」
どり「はっはっはっはっ」
サウザンド「？」
走ってきたどりがサウザンドの手を舐める。
サウザンド「いぬ・・・・・・。あの女のところに居た、いぬ」
手を舐め続けるどり。
サウザンド「おまえ、グローブをしていた手から、あの女の匂いを！」
どりを掴みあげるサウザンド。
どり「きゅーん」
サウザンドは、すぐに覇気がなくなり、そのままゆっくりどりを抱きしめる。
サウザンド「いぬ、私どうしたらいいの・・・・・・。たすけて・・・・・・たすけて・・・・・・クロー」
どり「あうーん」
サウザンドは泣き続け、どりも鳴いた。
――――――

火星。地球セイント統合政府本部ビル中枢。（夜）
狗狼達を先導するロングストレート赤毛の女性。

セラ「私は最高議長一等書記官セラ。帆風博士とはここの新型『Ｈ・Ｔ・Ｈ』を共同開発したの。よろしくね」
狗狼「狗狼だ、協力してくれるのか」
セラ「もっちろん。警備主任のリューガみたいに頭固くないもん」
玲子「玲子です。よろしくおねがいします」
みなこ「セラさん、お久しぶりです」
セラ「あー、やっぱりみなこちゃんだったか。どおりでみなわちゃんの生き写しが居ると思ったよ」
みなこ「そんなに似てますか」
玲子「知り合い多いのね・・・・・・みなこちゃん」

中枢に到達。巨大な魔法陣のように多くの装置が並べられた空間。

特殊戦闘部隊Ａ「我々は出入り口を死守します」
特殊戦闘部隊Ｂ「準備を急いでください」
セラ「みなこちゃんと玲子ちゃんはその球体に手を当てて。地球からの『Ｈ・Ｔ・Ｈ』の祈りを狗狼くんに伝えるのよ。自分の祈りもこめてね」
みなこ「はい」
玲子「解ったわ」
狗狼「俺はどうすれば」
セラ「貴方は中央で、ただ願えばいい。５００億光年先のセイント本星に貴方の想いが伝わるかどうか。貴方の願いの強さにかかっているの」
狗狼「俺の・・・・・・想い」

玲子が黙って狗狼を見る。

――――――

――――――

皆、大江　千鶴子のサイン入り最新刊を出す。

ファン３「委員長捕まらなかったねぇ。こんな時にどこ出かけたんだか」
ファン４「『私以上のファンなんかいないー！』っていつも豪語してんのにね」
ファン６「まぁ委員長のことだからどこかで祈ってるんでしょ」
ファン５「ねえねえ、さっきあっちのテーブルの子達も本出してたよ」
ファン３「ミスド班からメール来たよ、向こうも準備ＯＫだって」
ファン６「サイゼ班メール確認。４人でやるってー」
ファン１「あ！」
ファン２「どうしたの？」
ファン１「ほら、あの外走ってるの」
ファン２「あー」
ファン３「おぉ」
ファン４「なになに」
ファン１「凛先生が、凄い勢いで走ってる」
ファン５「本当だ。デートかな。ごめん、一番可能性の無いのを言ってみた」
ファン６「行っちゃった。あっち、学校だね」
ファン３「先生も、どっかで祈るんじゃないかな」
ファン４「あぁ、あの噂ね。アレ本当なの？」
ファン５「え、凛先生が大江　千鶴子先生と友達って言うアレ？」
ファン６「私直接、凛先生に聞いてみたことあるよ。凄い面倒くさそうな顔して『秘密よ』って言ってた」
ファン２「あー、そりゃ本当だわ」
ファン３「え、なんでなんで」
ファン２「考えてもみなよ。私が超売れっ子大先生で、貴方達が一介の教職員になった場合」

ファン４「ふんふん」
ファン２「教え子から何人も『先生ってあの大先生とお友達なのー？』って聞かれてみ」
ファン５「あぁあぁ、する！　絶対面倒くさそうな顔、私する！」
ファン６「友達であるがゆえに、『あんな奴大先生とかつけて呼ぶなよ気持ち悪い』って感じ？」
ファン２「言い過ぎ言い過ぎ」
ファン１「プライドと嫉妬と友情がないまぜになった、気持ちわるーい感じなのね」
ファン３「なるほど、で教え子に嘘もつけないし『秘密よ』になるんだね」
ファン４「なんと言うか・・・・・・凛先生可愛いな」
ファン５「うん、萌えるね」
ファン６「学校直ったら、少し凛先生に優しくしてやろう」
ファン１「素晴らしい上から目線ですな」
ファン２「あー、そろそろだよ」

６人皆、思い思いに手を組み、祈りの体制に入る。

ーーー

――――――

結局寝てしまった小雪を背負った深雪は、夜空を見上げ祈る。

小雪「まほちゃん・・・・・・」

寝ながらも祈っている小雪に、微笑む深雪。

――――――

凛のクラスの大江　千鶴子ファン女子が６人集まり祈る。

ーーー

引き戻される。
ななみの目の前に安藤みなわが居た。

みなわ「ななみちゃん、もう大丈夫よ」
ななみ「みなわお姉ちゃん・・・・・・」
みなわ「ほら、泣いたら駄目よ。『H・T・H』は心に反応するの。強く願いなさい」
ななみ「・・・・・・うん」
みなわ「ななみちゃん、もっと心を開いて想いを聴いて。時間と場所を越えた想いが、聴こえるでしょ」
ななみ「・・・・・・聴こえる・・・・・・何・・・・・・」
???『みなわちゃん・・・・・・みなわちゃん・・・・・・その子はななみっていうの？　いい名前だね』
多くの声『皆の妹なんだね』
多くの声『嬉しいよ』
多くの声『すごく、頑張ったね』
みなわ「また会えて嬉しいよ、３６９」
３６９『みなわちゃん、ななみちゃん、遥かかなたにいる弟のことを祈っているのね』
多くの声『君達の弟なら、僕たちの弟だね』
多くの声『私たちの弟なのね』
多くの声『幸せになって欲しいね』
３６９『私たちも祈っているよ、伝えてあげてね』

みなわはななみに微笑みかける。うなずくななみ。

ななみ「その想い、必ず届けるわ」

――――――――――――――――――――――――――――

ーーー

・」
優一郎「関係各所への通達や、未だマシューへの交信を禁忌とするセイント派閥もある。この方法が一番早い」
優「なるほど、首謀者は帆風博士かと思ってたが、裏で糸を引いていたのはじいさんだったか」
優一郎「いや、多くの者が望み、願わない限り成功はせんよ。私の力など祈りのたった一つに過ぎない」
優は来客椅子にドカっと座る。
優「なんか踊らされた気分だが、悪い気はしねぇ。俺もここで祈るさ」
優「（後はお前次第だ・・・・・・狗狼）」

――――――

涙目になっている委員長。すると、後ろからやさしく抱きしめられる。光でその姿は見えない。

???『相変わらず、不器用さんね・・・・・・』

玲子「！！」

???『レイちゃんは昔からそう。本心を隠して、周りのためにって暴走しちゃう』

玲子「お母さん！」

母『大切な人の願いをかなえてあげたいのね。でも、メイドさんが帰ってきたら大切な人を取られちゃう』

玲子「な、な、な」

母『メイドさんのことも大切なのね。本当に不器用さんね』

玲子「・・・・・・どうしたらいいの、お母さん」

母『大切な人とメイドさんが両想いなら、レイちゃんが勝つことは永遠に無いわ』

玲子「ズバっと言うのね」

母『でも、レイちゃんが大切な人の幸せを願うなら、メイドさんには帰ってきてもらわないとね』

玲子「うん・・・・・・そうだよね。私何を迷ってたんだろう。嫌な子になるところだった」

母『いい子ね、レイちゃん。・・・・・・だけど、本当の戦いはメイドさんが帰ってきてからよ』

玲子「え？」

母『考えても見なさい、レイちゃんは恋敵に塩を送った女性なのよ。大切な人に対してアピールポイント高いわ。メイドさんも貴方に助けられた引け目もあるだろうから、上手く押せば大切な人を奪い取れるかもしれない』

玲子「お母さん、全然いい話にまとまらないよ・・・・・・感動的な流れだったのに」

母『恋にルールなんか無いんだから、頑張りなさい』
玲子「セイントらしくないアグレッシブさね、お母さん。懐かしいわ」
母『一番貴方が必要としている思い悩む時期に、一緒に居られなくて、ごめんなさいね』
玲子「・・・・・・お母さん、お母さんをテロに巻き込んだ人を、恨んでいる？」
母『当時のレイちゃんぐらいの子供がね、車の前に飛び出したの。私もその子を助けようと思って飛び出した。そしたらその子爆弾もっていたの。狙いは車に乗っていた政府の人ね。その子、爆発するまで笑ってた』
玲子「・・・・・・」
母『私もその子も死んじゃったけど、恨んでなんかいないわ。子供にそんな生き方しか与えなかった管理者という組織はもう無くなったのでしょ？』
玲子「そっか・・・・・・なんか、ふっきれたよ」

玲子は、やっと素直に地球からの想いを受け止める。

――――――

もう一度大きく電気が消える。

優「ん？」

周りの気配が突然消え、誰も居ない真っ暗な空間に取り残された優。

優「おい、どういうことだ！？」

？？？『優くん、久しぶりだね』

後ろに立っている男の気配を感じ取る優。

優「フェルドランス・・・・・・」

フェル『いい夜だ。そう、思うだろ』

優「時間と距離を越えて心を繋ぐか・・・・・・世界中パニックになるぜ」

フェル『ここは『Ｈ・Ｔ・Ｈ』の真上。そして君の想いはとても強かった。君にだけへの奇跡さ』

優「何しに出てきやがった」

フェル『僕の計算通り、９９９に会ってくれたんだね』

優「どこまで予想してたんだ」

フェル『いや、漠然とだよ。まさかこんな大事になるとはね。流石に予想外さ。でも、ひとつだけ確信はあった、９９９が罪と向き合っていく過程に、きっと優くんと会う事になる・・・・・・とね』

優「チッ・・・・・・いけすかねぇな。ガキの内からあんなに背負い込んじまって、ロクな大人にはなれねぇ」

フェル『君と重ね合わせているのかい？　なら、救う方法はひとつじゃないか。今の君のようにね』

優「あぁ、そうだな」

フェル『僕にも、君達のように愛しい人がいたら、変わることが出

来たかもしれない』
優「・・・・・・俺は、お前がいたから２０年間生きれたんだ。それに気づかず、バカだった」
フェル『後悔はしなくていいよ。君に対する償いみたいなものだ。君がどんどん強くなっていくから、大変だったよ』
優「・・・・・・すまなかったな、フェルドランス。俺がお前を理解してやれれば」

フェルドランスは手でさいぎる。

フェル「これは僕の罪との向き合い方だ。君は僕の計算の上で踊っていただけ」
優「・・・・・・」
フェル「もう、行くとするよ。祈りのじゃまになるだろうしね。僕も９９９が幸せを掴み取るのを祈っている」
優「ありがとう、フェルドランス」
フェル「さようなら、優くん」

電気がつくと元の執務室に座っている優。

優一郎「心配ない、予備電力もある。ん？　どうした優」
優「いや、なんでもない。・・・・・・祈ろう」

――――――

セラ「強く願って、狗狼くん！」
狗狼「（まほろさん！）」

狗狼の脳裏に、紫陽花の花に囲まれ、庭で歌を口ずさむまほろが見える。
しかし、その紫陽花の花は、赤くよどみ始め、世界は暗転し庭だった場所に大量の死体が転がる。
狗狼は、必死に死体を掻き分けてまほろを探す。

狗狼「（こんなに殺したから、まほろさんが見つからない！）」

死体の山でやっと見つけたまほろは、魂の入っていない人形だった。
狗狼の全身は血にまみれ、目からは血の涙を流す。

狗狼「・・・・・・・俺は・・・・・・・幸せを望んで・・・・・・・いい訳が・・・・・・・ない」
玲子「アンタ、今更なにを・・・・・・！」

みなこが思いっきり力を込めて、狗狼の頬を叩く。
放心する狗狼。びっくりする委員長。

みなこ「私、狗狼さんが好き。お姉ちゃんも大好き。そしてお姉ちゃんも狗狼さんが大好き。これだけの世界からの想いを貰って逃げている狗狼さんは嫌い。過去なんか関係ない。お姉ちゃんを奪い返せないなら、狗狼さんの事一生嫌い！！」
狗狼「・・・・・・・」
玲子「・・・・・・・そうよ。誰に恨まれても、それが罪だとしても、メイドさんを奪い返して」
みなこ「狗狼さんは、私のヒーローだから、もっと頑張ってくれるんですよね」

狗狼「・・・・・・みなこちゃん、強くなったな。委員長、ありがとう。もう、大丈夫だ。やれる」

狗狼は目を閉じ、多くの想いを受け止めながら、ただまほろのことを考え、想う。

セラ「（この子達の想いがこんなに強いのに・・・・・・まだ届かない・・・・・・お願い、届いて！）」

――――――

？？？「皆が、幸せになりますように」

――――――

――――――

マシュー「私には連綿と続く生命に対しての責任があります」
狗狼「そんな物、誰も望んじゃいねぇ！　管理者と同じ言い分だぜ、糞がっ！」
マシュー「私に、そのような言葉を言ったのは、貴方が初めてです」
狗狼「こんな羊水に浸って、データばかり見ているから、アンタには何もわかりゃしないんだ！　人の心の暖かさとか、やさしさに癒される感情とか、アンタなんかに解るわけが無い！」
マシュー「多くの者を殺した口が言うことですか」
狗狼「その罪は、俺が死ぬまで背負っていくことだ。そんな風に生きるって事が嫌だった・・・・・死にたかった。でも、まほろさんとなら生きていける。愛しているんだ」
まほろ「一緒に背負って生きましょう。私も愛しています、狗狼さん」

狗狼の後ろに、メイド服を着たまほろが立っていた。

マシュー「今、処分用の肉体『人間』の生成が完了しました。廃棄します」

狗狼は、言葉が出ない。

マシュー「まほろ、貴方は私との融合を拒否してしまうほど固体として進化してしまった。私には多くの命を殺めた狗狼やサウザンドの想いを理解してあげることはできない。私にとってひとつの生命は、ひとつの生命と等価値なのです・・・・・。でも、貴方は、彼らと共に生きたいと言った。その想いは興味深いものです」
まほろ「多くの生命を生み出し見守ってきたマシューさんにとって、いえ、マシューさんでなくても、多くの生命を殺める行為は許されざる大罪。その罪は十分承知しております。ですが、それでも人を愛する心を、私には止めることは出来ませんでした」

マシュー「行きなさい。私たちの心は、もはや交わることはありません。貴方のためでもあります」
まほろ「ありがとう、マシューさん」

狗狼は、泣いている顔を見られる前に、まほろを抱きしめる。まほろも強く抱きしめる。

狗狼「・・・・・・約束」
まほろ「え？」
狗狼「戦うなって約束、破るなんて・・・・・・許せないよ」
まほろ「ごめんなさい、狗狼さん」
狗狼「もう、どこにも行かないでくれ。愛してるんだ、まほろさん」
まほろ「その約束は、その約束だけは、一生守っていきますね」

マシュー「ここは神聖な場所です。貴方達の居てよい場所ではありません。去りなさい」
狗狼「・・・・・・アンタも地球に来ないか。こんな所に独りなんて、寂しいよ」
マシュー「私は、ここで貴方達の文明が、精神体では無く、その足で到達する日を待っています」
まほろ「マシューさん、いつかきっと貴方にも愛してくれる人が現れます」
マシュー「・・・・・・貴方と融合できなかったので、その想いを正確には理解できません。ですが、きっと・・・・・・暖かい」
狗狼「・・・・・・マシュー」

狗狼の精神は、急激に引き戻されていく。

マシュー「さようなら、人間達」

――――――

優はヴィナス特殊戦闘部隊全員に通信を入れる。
優『状況終了。証拠を残さず各自撤収。後日、ここの警備主任宛に履歴書を送りつけてやれ。・・・・・・感謝している』
コマンド『美里少尉とまた共に戦えて光栄でした。オーバー』
特殊部隊Ａ『お疲れでした』
特殊部隊Ｂ『またおごってください』

皆、口々に礼の通信を入れて去っていく。
優「俺も帰るよ。終電逃したら大変だ」
優一郎「・・・・・・祈りの間、古い友人に会ったような気がする・・・・・」
優「こんないい夜だ。奇跡は俺にだけじゃもったいねぇか。じゃあな、じいさん」

『緋立娘』の鼻歌を歌いながら、去っていく優。

――――――

二人ともまほろに抱きつき泣き出す。

まほろ「ただいま、みなこちゃん、委員長さん」

狗狼「おかえり、まほろさん」

まほろ「狗狼さん・・・・・ただいま」

――――――

辺りが一瞬、光に包まれ、サウザンドの倒していった体が止まる。
狗狼、まほろ、みなこ、委員長に、掴まれているサウザンド。

サウザンド「・・・・・・クロー」
狗狼「お前の祈りも聴こえていた。祈ってくれたんだな」

サウザンドはメッセージカードを握り締めていた。

サウザンド「・・・・・・うん」
まほろ「貴方はきっといい子だって、私信じていましたよ」

引き上げたサウザンドを抱きしめるまほろ。

サウザンド「う、うあぁぁぁぁん」
どり「あうあうあうあう」

声を上げて泣くサウザンド。

――――――

ーーー

ななみ「んー、可愛いわ。学校でいじめられたりしないか心配ね」
狗狼「俺は生徒をいじめるんじゃないかと心配だよ」
ななみ「狗狼、学校じゃ貴方がちゃんと面倒見るのよ」
狗狼「やっぱそうなるんだよな」
まほろ「はい皆さん、朝食にしましょう」
ななみ「その前に、発表があります！　はい、聞いて聞いて」
狗狼「（朝からテンション高いな）」
ななみ「今日から学校なので、サウザンドちゃんに名前がつくことになりました！」
サウザンド「！」
ななみ「・・・・・・今日から貴方は『希炉（きろ）』ちゃんよ。安藤　希炉ちゃん」
希炉「・・・・・・キロ・・・・・・アンドーキロ」
玲子「希炉ちゃん、おめでとう」
みなこ「可愛い名前だね、希炉ちゃん」
希炉「名前も嬉しい、けど、マホロと、ナナミと同じ苗字・・・・・・嬉しい」
まほろ「希炉ちゃんは私たちの妹なんですから、当然ですよ」

希炉は、心から笑顔で微笑んだ。
その様子を見て嬉しくなる狗狼。まほろと目が合い微笑みあう。

――――――

狗狼「ななみさんも？」
ななみ「希炉ちゃん初日だし、凛さんに挨拶してからヴィナス行くわ」
希炉「学校、楽しみ。もう壊さない」
玲子「そ、そうね」
みなこ「波乱の予感がします」
狗狼「うー」
まほろ「では、いってらっしゃいませ！」
玲子「いってきます、メイドさん！」
みなこ「お姉ちゃん、行ってきます」
ななみ「帰り早いから、夕飯もヨロシクね。いってきます」
狗狼「いってきます、まほろさん」

歩き始めようとした皆に気づかれないように、まほろが狗狼に近づく。

まほろ「いってらっしゃい、狗狼さん」

まほろは、狗狼の頬にキスをした。

まほろまてぃっく　～癒されしセカイ～　４話　『火星年代記』
ＥＮＤ

4話　『火星年代記』（後書き）

解説

こんな二次創作でも色々思う所があって製作しているわけでして。
その解説なんかしてみたいと思います。

事の発端は２００９年夏ごろでしたでしょうか。
俺と同じ様に『まほろまてぃっく』大好きっ子のギャバン君が、
仕事で忙殺されつつあった俺に気を使ってかメッセンジャーで話しかけてくれました。

ギャバン「おい、まほろアニメで新作やるぞ」
俺「本当か！？　続編か！？　続編なのか！」
ギャバン「ほら、公式告知」
俺「おぉ・・・・・・紫陽花に囲まれたまほろさん。歌も感動的だ・・・・・・（大好き補正フィルター）」
ギャバン「どうやら、２期の途中の話になるらしいぞ」
俺「なんだ、続編じゃないのか・・・・・・」
ギャバン「昔やった夏のスペシャル見たいな感じなんじゃないか？　戦闘もあるみたいだけど」
俺「これはこれでめでたいことだが、俺は続編が見たかった。アニメなり、原作なりのあの後の話を作るべきじゃねぇの」
ギャバン「あの終わり方のあとは続かねぇだろ」
俺「うーん、別にマシューから分かれた別固体がマホロと同じ見た目でメイドやっていれば、新作まほろまてぃっくになるんじゃねぇかな」
ギャバン「おぉ、それいいな」

俺「優じゃもう厳しいから、別の主人公用意して、みなわちゃんはどうにかして出せば、もうまほろまてぃっくになる」
ギャバン「優厳しいとか言うなよ・・・・・・でも、そう言うのみたいね」

この話題を切っかけに、仕事の合間にプロットを書いてみたりしました。
結局、その場ではロクにプロットも完成せず、そのまま手付かずで、１ヶ月弱忘れていました。
２００９年の１０月ごろ、俺は体調不良で病院に入り浸ることになります。
仕事も基本的に断る状態で、このままでは創作意欲を発散する場がないと考え、
趣味として本気でまほろまてぃっく二次創作シナリオを書いてみることにしたのでした。
この様な経緯でこの作品の８０％以上は病院の待合室で作成されていきました。

――――――

原作「まほろまてぃっく」は主人公がまほろであって、ヒロインが美里　優なのです。

俺自身の体調や制作期間を考え、今回の作品は全４話と設定しました。

あくまで、主人公　学生男、ヒロイン　まほろとしたかった俺は、短い４話の中で、主人公として動く新たなるキャラクターが必要でした。

学生でありながら、多くのものを背負い、乗り越えられるキャラクターを。

俺は昔シナリオライターになる前に、同人で小説を書いていました。

その作品のキャラクターに、元暗殺者の男が登場していました。

彼は罪にさいなまれながらも友人を救うために戦うと言う流れでした。

そのストーリーは残念ながら完結させることが出来ず、

その男がどういう答えを出すのか伝えきることが出来ませんでした。

その心残りは、１０年近く俺の中にわだかまりとして残っていました。

「この機会に、この男が抱えていたテーマを解決させてみよう」

そう気が付いたとき、まほろまてぃっくの世界観と融合し、ラストまでのストーリーが一気に組みあがりました。

完全に学生・美里優と真逆のキャラクターとして生まれた狗狼に、違和感を覚える人も居るかもしれません。

しかし、到達すべきテーマは同じ所にあるので、きっと読み進めて行く内に払拭できると信じています。

しかし、やりすぎだったかと今でも不安に思うこともあります。

授業は寝る。学校は行きたがらない。逃げようとする。

これは俺が主人公に共感するために入れた要素なので、仕方ありません。

昔の俺の同人を読んだ事のある人は「またこんな主人公か」と思うかもしれません。
しかし、これで最後です。このテーマを扱うのは。
このテーマを考えたのは１０年前の俺。流石に今の俺とは思想が違います。
今回書いていて、それに多く気が付かされました。

――――――

でもあります。
実写では多い手法なのですが、アニメでは余り好まれない傾向もあるようです。
今回は同人なので、俺の好みを優先させました。この方が、面白い。よ？

原作者である中山文十朗先生のインタビューに、
「まほろは完璧な心を持っていて、これ以上成長などがないキャラクター」とコメントがありました。
今回作るにあたり、「これ以上の成長がない」ではもったいないので、
各まほろには個体差があり、Ｖ１０４６－Ｓ　まほろは心を『進化』させていける。としました。
これは、マシューに逆らうことはありえないまほろと言うキャラクターが、
ストーリー上、ラストに融合を拒否していることに繋がります。

多くの者を殺した狗狼を、マシューは理解してやることは出来ません。
マシューにとってひとつの命の重さは、ひとつの命と同じと考えるからです。
当然それは正しい考えで、マシューの清く正しい心に何の間違えもありません。
しかし、まほろはそれでも狗狼と共に生きることを望みます。
まほろのマシューとの決別は、完全な「固体」としての進化なのです。

――――――

サウザンドと言うキャラクターについて

彼女は救われなかった狗狼そのもの。過去の狗狼の鏡のようなキャラクターです。
しかも彼女には、狗狼のように免罪符「マインドコントロール」はありません。
全て自分の意思で虐殺を行ってきた、そんな改造人間です。
彼女を許すこと、救うこと自体が「罪」で無くてはならない。
生半可な気持ちで彼女と関わることは許されない。そんなキャラクターとして登場させました。
なかなかの緊張感を作中振りまいてくれたので、書きあがってみれば一番好きなキャラです。

――――――

余りに優しく素晴らしいキャラクターなので、ななみを書くに当たって気をつけていたことは、
まほろ以上に狗狼の心を癒してしまう可能性です。俺がハラハラしてしまいました。

姉みなわが大好きで尊敬している彼女は、みなわの子供であり瓜二つのみなこの事が
好きで好きでしょうがありません。みなこが美里家でメイド服を着るようになってからは、
ななみの目には若かりし頃のみなわその物に見え、一層みなこ萌えが進んでいる様子。

しかし、ななみは「狗狼」とか「希炉」とか変な名前をつけている辺りに、只者ではない気がしますね。

――――――

第一稿でギャバン君に「狗狼のキャラクターですんなりと『さん』付けは不自然だ」と指摘され
現在の流れまでこの部分だけで三稿かかりました。
今のところギャバン君から再指摘はないのでホっとしております。

――――――

狗狼が変な名前過ぎるので委員長の名前を普通にしました。際立たせるためですね。
更に、彼女にはみなことの対比として辛い過去を背負ってもらいました。母親が管理者に殺されています。
管理者を憎む遺族の代表として登場させることにより、狗狼を精神的に追い込みます。
しかし、まほろがみなわに語った様に、全てを隠さず話した狗狼を（許しはしませんが）受け入れます。
彼女の「許せないが狗狼を認める」矛盾した心は４話まで引きずることになります。

全４話しかないのにまほろさんがほんど出ない２話目。３話で大活躍だしいいかな・・・・・。あんま良くない。

――――――

ひ読んだ人は
この２ヶ月を色々想像して見てくれるとうれしいです。

ーーー

落ちとして使われるまほろさん。ななみの良いシーンの後に、ヒロインなのに扱いが酷いですね。
もう少し、いいシーンを用意してあげればよかった・・・・・・。
2話に引き続き可哀想です。

――――――

狗狼が美里家に来るまで、遠巻きに監視し続けていました。
つまり、狗狼と同じ期間、３年余り誰も殺したり、破壊活動を行ったりしていません。
３話中、ななみも帆風博士も殺さなかったのは、彼女なりに殺すことに疑問を持ち始めていたからです。
その心の奥の微かな揺らぎを、Ｖ１０４６－Ｔ　まほろ　が読み取り「この子を助けて欲しい」となる訳です。

３話目にして、やっとまほろ大活躍かと思いきや、命を賭して戦ってしまいます。
サウザンドを止め、狗狼を助けるには『輝ける闇』同士の相打ちしか無いとまほろは考えたからです。
『輝ける闇』同士交わった瞬間、三体目のまほろ『Ｖ１０４６－Ｔ　まほろ』と心が繋がり、
まほろに、『Ｖ１０４６－Ｔ　まほろ』の想いが託されます。
まほろには「狗狼を助けるため」という想いと、「サウザンドをも助けたい」と言う二つの想いに駆られます。
その両方をかなえる為に自らを犠牲にし、サウザンドの『輝ける闇』と共に、魂は光となって飛び去ります。

――――――

４話は語りたいものはほぼ本編に書きましたし、あまり解説はいらないかもですね。
原作ありきなら、ここまでやっちまおうと、ちょっと開き直って書きました。
２．５話が良いきっかけになってくれましたね。
３０代とりおまてぃっくを出した時点で、もう出し惜しみと言うか、原作キャラ登場に規制をかけても意味が無いなと。
思い切って、出せるキャラをほぼ全て出しました。

当然、火星の辺境の町から最後に祈ったのは、あの人です。
あの人は、例え離れて時間が立っていても、式場先生と何か絆みたいなものを持っていてほしいなと思い、
地球で奏でられているバイオリンの音を、あの人が火星で感じ取る演出を入れました。
まぁ、あの人ですから、そのぐらいやってしまいそうじゃないですか。

サウザンドは、完全に独りになった思い、耐え切れず５００ｍあるヴィナスビル屋上から身を投げようとします。
３話にて特殊部隊が上空１０００ｍからダイブして着地して来ていましたが、
プロテクターはパワードスーツになっていて、着地寸前に一瞬バーニアで衝撃をなくして着地します。
生身の肉体（おそらく頭から）ではサウザンドであろうと、狗狼であろうと即死する高さです。
『Ｈ・Ｔ・Ｈ』にて、サウザンドの想いや祈りを聞きいた狗狼は、いち早くサウザンドの元へ行こうと思っていた。
更に、まほろもサウザンドを助けたいと願っていた。その二人の想いを酌んでマシューはサウザンドの元へ彼らを送ります。
サービスでみなこと委員長も一緒に送ります。マシューの力はちょ

っと便利すぎますね。
おそらくマシューにとって今回の諸々の行いは、生命への平等な介入の観点から言って罪なのです。ですが、
『人と関わり、相手を助けたいと言う気持ちは、罪すら厭わない物であって欲しい』と言う、
この作品のテーマを背負った行動と言えるでしょう。
助けられたサウザンドは、まほろに抱きしめられ、初めて救われるのです。

――――――

今の家がどういう使われ方をしているかも知っているでしょうから緋立市に帰ってきたとしても、近くのマンションとかに住むかもしれませんね。お金は有り余っていそうですし。

――――――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6604j/

まほろまてぃっく～癒されしセカイ～

2010年10月10日18時38分発行